

東洋學藝雜誌第四卷第六十五號

明治二十年二月二十五日發兌

○

東洋書籍編纂法

明治二十年一月十五日久徵館に於て

末松 謙澄 演説

林 茂 淳 筆記

諸君 私はこの兩三日前に櫻井錠二君のお目よの、りま
 した所がこの久徵館に寄宿の加州の學生諸君から何ぞ私
 よ演説をしてくれといふお頼みを受けました。が實に間合
 ひも無いことでドウいふことを言はうといふ考へも御坐
 りませぬ。併し私も加州のお方は縁故が無いこともあ
 りませぬから何か諸君のお爲めよなることを申すことが
 出来るなら幸と存じてお請合を致しました所が極日數も
 少ない上に用事もありませぬ故これぞと申して用意する
 おとも出来ませんでした。其れゆゑ今日申すことはホン
 ノ出鱈目でありますから順序などは立ちますまい。ドウ
 カ其のお積りでか聽きを願ひます。

抑々此の演題は至つて廣いことで容易に言ひ盡すことも
 出来ませぬしまた廣く書物を讀んだ人で無ければ言へな
 いことです。其れで私が何々の本何々の本と書物の名を
 言つても諸君は私か其れを皆な讀んだとお思ひなさると
 間違ひます。また私は素より學者と以て任するもので
 無いから言ふまじと間違ひの虞も有りませう。若志間違
 ひがあつたらドウカお正しを願ひます。

近年日本でも著述の法が進みまた第一に活版といふもの
 が出来て盛に行はるゝ様になりました。尤も前にも木版
 の活版があつたといふことです。が近來は鉛で造る様にな
 りました鉛版といふものも出来それを製本なども進みまし
 たよ付き著書もヨホド殖れた様に見えます。併し著書の
 殖れたよ付て其の体裁の得失を研究しなければなりませ
 ぬ。近來西洋思想の輸入からして餘程進では來しましたが
 まだまだ充分ではありませぬ。これから先益々改良を
 加へなければなりません。其れよ付てハ専門専門で違
 ひはありまじやふが先づおれまでの弊を擧げて其れを捨
 て新たに良い所を取るが肝要でありまじやふ付てはこれ

から私が支那日本の書物に付て其いかぬ所を言ひませ
う

書物にも色々ありますが先づ大別して哲學もの小説もの
歴史もの、三つとします。其の外に隨筆ものもあります
が隨筆ものよは哲學體もあり小説體もあり歴史體もあり
ますから一の種類と爲すには及びます。又詩歌は自ら
一種類なれども是は姑く捨て論じませぬ。扱小説體と申
せば總て想像より事實を假造したる者よて是には演義體
の者も入れます。即ち演義三國志とか演義列國志とかいふ
様なものであります。これは正史よ據つて色々のアヤを
付けて書いたものです。次に物語ものは事によると小説よ
入らぬものもありませんが概して言ひますと小説の中よ這
入るものです。其れから人情本といふものは勿論小説體
此重なる者であります。又私が哲學の書物といふは汎く指
したるもので委ましく言ふと眞の哲學よは屬さないものも
ありましょふ

例へば韓非子などを哲學者と云ふは如何しき様ですが總
て理窟を述たる書物は先づ哲學類の書と致します

この三種類よ付て一々考へを下します。よ上古から段々傳
つたものは書經などが最も古いので次には老子莊子孔門
の諸書其の他諸子百家の書などであります。書經はチヨ
イと見ると歴史に屬する様であります。がよく考へると哲
學體の方です。歴史と言つて事實と擧げたよりは教へよ
なることが多くまた讀んで居る人も歴史としては讀んで
居らなひに違ひない様です。さふ見ると東洋で一番早
書物の哲學類にあるのです。御承知の通り春秋は魯の日
記よ據て書いたもので其外の孔子時代迄よは歴史が、ッ
たものは無いと思ひます。其他は諸子百家の書でありま
す。歴史は早くより開けて居つたかも知れないが秦の始
皇が焼いた爲めに亡滅したのであらふと言ふがドウの分
りませぬが兎ふ角よ後世よ遺りたる者はありませぬ。且又
ドコの國でも歌によつて古い歴史を知ることが出來ます
けれど支那には書經の中よ五子之歌といふがある位よて
其外には歴史が、りたる古い歌はありませぬ。各國とも
書物の開けるには歴史を歌に作つたのがありますが支那
よ其れの無いのは最も怪しいと思ひます。ろこで第一に

東洋の哲學書は体裁よ於て不完全と思ひます（あながち哲學書のみが不完全ではありませぬが）諸君も定めて百家の書を御讀みで御座いませぬが百家の書は首尾貫徹して前後のムスビをつけていた書は一卷も無ひ様です先づ老子を讀んで見るとチヨイと書いて分ることでもチヨイとは書かず簡單なる思想を繰り返してあるばかりで少しも首尾が貫徹して居りませぬ 韓非子でも管子でも一口話しを擧げてあつてツマル所がたゞ隨筆を集めたもの、様に見受けられます 去るにより同じ思想を幾遍も繰り返す弊があり偶繰り返して居ないと思ふと矛盾して居ます 例へば韓非子に人君の持つて居るもの、といふことを説く、前と後と違つたことが書いてあり少しもシステマチックといふことはありませぬ 孔孟の諸書よ就てもや、方式あるは先づ大學次いで中庸ぐらゐなるのですが其も大學の後世の人がこぢつけて前後を揃たる事も少らず荀子あしても一口話しです 漢の時代に至つて賈誼といふ人が新書と著したが史論かと思へば政事論ありて政事はかういふものと言つて居るかと思ふと、あ

とは建白書みた様な曖昧のものをヒヨイヒヨイと出して居ます。王充の論衡も差して違はず西晋六朝頃ふなど書物などなくなつて學者は賦とかいふもの、頭を傾ける様になりました唐の世よなつて韓退之や柳宗元などは原道だとかへツタクレだとかいふものを書き得意して居れども孰れも一篇の短文章のみよて前後の貫徹した書物とてのハ一ツもありません 下つて宋になつても種々の學者が出たる中よも程子朱子などは徂徠も之を豪傑の士と言つて居るが其豪傑の士がドンナことをもをえたかといふと何もこれといふ立派な著書として居ない程子の弟は易の註解を書いた位なもので朱子の書いたものはチリチリバラバラで先づ四書の註解位いがよいのですが其れも自家撞着なことが多く例へば仁の字一字でも矛盾を居ますがあゝの位な人でありながらモット立派なことを書くことが出来ないのはなぜだらうか朱子の語録も元より隨筆に過ぎず陸象山の書いたものでも同じことです明の世よ至つて貴いのは王陽明ですが別に立派な著書あるにあらば尤も傳習録ハ人に珍重せらるれども其れも弟子が先

生よから言つたと言ふ一口話しを書いたものです

日本にうつつて見ると哲學と言ふ思想はヨホド少なく其れも支那の書に據つて説を付けたものにすぎず其中よて最も目立つ學者は先づ徂徠とか仁齋とかであるが其れがドウいふ書物を書いたかといふと徂徠は論語徵學庸解辨道辨名ぐらいなものですこの辨道辨名は徂徠がヨホド力と盡したといふことですが順序はイッラかある様ですがイトグチを揃へていつたものではなし詰り隨筆たるを免れず仁齋の論孟古義といふのも同じことで一部の註解書よ過ぎす其他總て推して知るべしドウも私が考へて見ますよ支那日本の哲學書にこれこれは首尾貫通して讀むべき本といふものは先づ一卷も無いと思ひます何でも將來書を著すには規律を正しくして首尾脈絡の貫通したる者を作るが肝要と思ひます且つ東洋哲學書の弊は字のデフィニション即ち解釋を大事にしないから起つたことが少なからずギリシヤのソクラテスは先づ文字のデフィニションをきめてから物を言ひました西洋哲學の進歩は是よ因りたる事多しとの事です東洋では如何よも此邊が不

足ですはやく言つて見ると一人は「ヤマトを日本全國を
含んで言ふぞ」と言はないでた「ヤマトの中よは大阪
がある」と言ふと他の一人ハ「イヤナリ」そんなことは無
い」と言ふ前のはヤマトハ日本全國を含んで言ふ積り後
のハ五畿内の大和といふ積りで銘々で見解してデフィニ
ションをきめずよ「さうで無い」「イヤさうだ」といふも幾
んど同じこととて無用の争が多く隨て自家撞着のことも生
じて來ます近來に至つては西洋の思想がはいつて來まし
たがまだ如何ほせでもありませんから若し諸君の中に書
物をお作りよなるれ方がありますなら能くさういふこと
に注意して其のれ積りでお作りを願ひます哲學体の其れ
だけにしておいて小説体のおとと言ひませう支那よは古
へは小説体のものはありませぬエピック即ち長歌体の詩
歌及び演劇本ハ一方からは小説体に入れていふことも出
來ますが其れも古代にハありませぬ 下つて西晋六朝
の頃に賦が盛に出來ましたが是は小説の部には入れ難し
唐の頃西廂記とか燕子樓の記とか申すものがあるそふで
す小説とまではいかず尤も玄宗のことや楊貴妃の事を

いたものがあるかも知れぬが私は知りませぬそこで支那の小説は先づ元明以來だろうかと思はれます。これは私の無學によるかも知りませぬが私はさう思ひます彼の演義体のももまた金瓶梅とか肉蒲團とか言ふ様な人情体のももまたローマンスとも稱ふべき水滸傳といふ類のものも總て後世の著述でありますまた日本に取つて言ひますと日本で小説体のはぢまりは物語もので其第一は竹取物語であらうとの事です其れは源氏物語の中に物語本の親なる竹取といふことがありますから竹取物語が小説体の始めでせう外よそ其れより古ひものは無ひ様です續いては空穂物語榮花物語源氏物語など續々と出來其れが過ぎたところで坊主などが考へて小説よ似たものゝ書いたので平家物語でも琵琶法師が歌へる様に書いたもので事實よりも詞に身を入れたるものであり又太平記なども殆んど同様のやうですが先づ是は歴史として小説でも無いものよしませう。足利の頃能謡が出て來ましたが是は自ら一種のものにて先づ小説体には入れぬが宜かるふことで日本の小説体は一旦中絶して徳川氏の盛時に至り京

傳馬琴春水などが興つて始めて物語類とは体裁の違ふた一種の小説体が大よ起りました。京傳馬琴などは寧ろローマンスよ近く爲永などは純粹の小説即ちノウベルです又浄瑠璃本の盛に出た事も其頃の事です浄瑠璃本の始めハ識田信長よ仕へた小野お通の作だと申す事で徳川の世となり太平のつゞくに隨ひ種々を作者の出たのです又近年よ至つて所謂政治小説なるものが追々と出るやうよなりました。ところで小説の短所はドウいふ所にあるかといふに先づ演義もの及び馬琴の歴史小説等は其長たらしむことですヒストリカルローマンス演義三國志八犬傳の様なものハアマリ長すぎます。長くなるよ最初はよくてもしまひよは悪くなり其上男女の立てもの即ちヒヤロー、ヒロインが多くなるとはならぬ様になります勿論支那で長たらしき演義ものが澤山出來たるも眞の歴史の書方が悪くて面白くなきよ因る事少らずとも思はれますマコーレーの言ふ様に歴史を小説のやうよ流暢快怡よ書いたものがあつたら演義体もあれほどの事ハありますまひ「長いといふことを言つた序に

今少し言ひませうが日本でも馬琴の八犬傳は皆を讀んだものゝ無からうと思はれますまた長いから著者も自然情る様になり始め取掛たもので畢らぬ様なのがあります馬琴の開卷驚奇俠客傳なども面白ひことは面白いガマトマリが付て居ませぬ源氏物語も長すぎて其實纏りが付て居ませぬ雲隱の帖は標題のみありて中はなし和學者の大層之を奥深しき様に云ふもあり又紛失したる歟も知れぬと云ふ説のなきでもないが假令彼の一帖が完きとて甘く纏りの付きしとは思へれず長くても面白といふのは水滸傳ですが私ハツンナものを讀んで居ては學問が出來ないと思つて少しばかりでよしました

一体長ひ小説の書き方は初めの人物に力が入りすぐるとあと抜がするとの事です先づ力ならば初め五貫目次に十貫目其れあら十五貫目二十貫目と云ふ様に段々と目方を重くしていかなければなりません先入主となるものであるから同じよを書けば前の方がよく見ゆるに違ひありません其れなら先きへゆくほどチウチをよくしているなければなりません水滸傳は今言つた様よ

くしてありまするふで馬琴は之を看破し八犬傳も其のツモリで書きかけたるふですがそこよ氣は附て居ても思ふやうにいかかつたと馬琴が自ら歎じたと申す事です成程八犬傳では先づ信乃濱路あたりの處であとはイヤになります馬琴すら斯の如くであるから長いものは逆も一通の作者の手に叶ひますまひ一体あまり道具を餘計よ持ち出さない様にヒヤロー、ヒロインと多く無い様お志なければなりません

今申したのは演義もの、長さよ人の配り方のことでありますが人情ものよ移つて申せばドウも下品なものが多いこれは最初より猥褻なことを書くつもりなら仕方が無いがさうで無くて猥褻に陥ることがありますが成るべく左様なことを避ける様よ氣よ附けなければなりません肉蒲團などは故さらに書いたるものゆへ別よしてれて種彦の月下れ菊おどには初めの方に今の小説家は兎角タカラモノの紛失とか泥棒とか種々の事を書くがおれはうふいふことで無くて面白く上品に書ひて見せると言ひながら開卷の處に丁稚と娘とチ、クリアツて娘が腹を指して

コンナ腹よなつたからといふことが書いてあります 其れも先きに成りて胎内の子に何か関係があるかと思ふと何の關係も無くまた子の生れたることもありません誠にも無用な猥褻です斯る類は注意して書ぬやうにすべきことであらうと思ひます

また物語で言ふと源氏物語などの日本よ出たるは感心です 支那には却つてア一いふものは無いやうでも假令あるよもせよ源氏物語時代までにはなひやうです若しあるなら云ふて下さひ併し兎に角に源氏物語の作者を支那の手本を取りたるものではなきやうと思はれますれを愈々感心ですが其感心するに随つて短所があつて遺憾とする所も亦随分多い其他の物語ものも大同小異です其短所と申すはまづ同じ事の繰返しの多きに因りまをまづ景色を言ふ所にヨホドよいことがありますが併し皆な同じ様なことばかりです是は源氏物語枕の草紙などをお讀みよなると分る事で其云ふことは何かと云ふと風がドウだとか月がドウだとか螢がドウだとかいふことのみ同じやうな文句で書いてあつて勇壯といふことも無ければまたモノス

ゴイといふことも無い モノスゴイことといへば源氏が若紫を二條院に連れてゆひた處は庭のさきも梟がゐるといふ位なもので誠に變化が少い様に思はれます後世書物を書く人は成るだけ違つたことを餘計書く様よせなければならぬことと思ひます

たゞ源氏物語の話しても一條一條に話しを拵ひたもので一條でしまつて居るかと思ふとさうでも無く續き物かと思ふとさうでも無い學者の横の堅とか堅の横と歎いふ様な下らない名を付て居りますが是等は私の感腹しない所です 畢竟順序を立て、ないので先きにある事柄を前の條よもつていつてあることがあり前の事とさきにいふ事があります此等も短所の一つであります 今一つの日本小説の足らないのは小説物の男は極懦弱な馬鹿者である事です尤も色男の方から言へば利口なもの知らないが丹次郎などは實は馬鹿極まつて居る其他一として然らざるありし 大層讀んだ様は聞ゆるか知れませぬが決して讀んで言ふのでは無く多分さうだらうと察するのです 實にどの小

説でも男に働きのあるのはありませぬ たゞ一つ種彦の月下の菊といふのには男に働きのあるのがあります 其れは清十郎といふ放埒なる才子が勘當中は信洲の山持から或る女をくれろと所望さるゝとやることは出来ぬと言ふ何でもアナタの望みをかなへるからといふときに若しものことがあつたら材木をくれろといふ約束をした所が他日よなつて江戸に火事があつたときも材木を江戸に持ち出して賣つた所が大層まうかつたといふことが書いてありましたが此の外には男の働きのことを書いたものは私の知りませぬ

小説も色々あつて風俗を顯はすのもあり性質カラクナルと顯はすのもあります日本よは眞に性質を顯はすのは至つて少ない其れは哲學が無いからであります 源氏物語などに少しはありますが至つて少ない また日本では社會の様子に違つて居たから仕方ありませんが女は藝者か女郎に限る様ですがドウもこれではいけないからうと思ひます其れが爲め娘ツ子などには小説を續ませない様になつて居ますが尤も悪い小説は識せては悪いが、まるで讀ま

せぬといふは却つて間違ひで話しの種をどには小説を讀ませるのも必要ですが其れから考へても小説の必要はあるよ違ひないが其の中には女郎か藝者で義理を立ると云ふば身と賣る事ですがよく注意して將來は花柳社會に屬せないものとヒロインとしなければならずといひます近來では大分政治小説が出るやうになりました政治小説も無ければなりません 矢野の經國美談末廣の雪中梅今度出来た新日本などは皆政治小説の方であるがツシヤル、ノーベルの方はまだ一向に出来ませぬ 今言つた政治小説を書いた人は大抵政治論を奔走して居る人だから政治小説の方が書きよいに違ひありませんがドウかこれからはツシヤル、ノーベルも書いて貰ひたいものです 先だつて末廣に話した所がツシヤル、ノーベルはむつかしいと言ひましたが實にむつかしいことはむつかしいに違ひありません 併しこれからは西洋の小説を讀んで手本とすることも出来ましやうから追々ツシヤル、ノーベルを書く様に致したいものです 併しこれを書くくむつかしいとは言ふ種が少ない 娘節

用でさへ幾分かたゞの人のことで桃の節句の事から書き始めてありますが、いまは藝者のおどになつてしまひますが見つけやう次第で今日でも随分種になることはありませう。今日の所では娘が政治演説を聴きに往くといふことがよく政治小説お見ゆるがたとひ政治小説でも政治演説を獨りでつか／＼聴きまは行く様な女はアマリ有り難くない政治小説でもさうであるからよはワシヤル、ノベルではなほさらよい女の種を見附ることが肝要でしやう

先づ小説に付ての概略はうんなものです。次ぎに歴史に付ては私はもはや書いたものもあり言つたこともありません。委しい事は申しませぬが第一よ古いのは春秋の經其れから左傳で漢の時代よ史記などが起つて來ましたが先づ編年体紀傳体紀事本末体といふ様なものでこの諸体へ孰れも面白くないこのとひ東洋學藝雜誌にも出しておきましたから更よ申しますまい。また文章上から言つても東洋の歴史はヒカラビて居て面白くないマコーレーが歴史はドウ書くかといふことお付て歴史は

小説体に書かなければならぬ事實を擧げなければならぬがマルデ事實を擧げると却つて事實よ背く様になると言ひ其のタトへにこゝに蠟石の像を作つたところが眞つ白い、人間に眞つ白ひのは無し眉は染める方がよいと言つて黒くする、するとイクラか眞の人よ近くなるが目がくぼくなつて居ていいけないと言つて飯粒か何かで高くする今度の唇も染るがよいと言つて染めると段々本當の人よ近くなるが其れで實かと云ふと實に近いはど實を失ふ様よなる。中々一々本當よ書けるもので無いから調理をしていつて倦まない様にしなければなりませぬ。讀んで卷の畢るを知らずと云ふ様よある方がよい。東洋の歴史は極ヅライであるも云ふは唯々表に顯はれたことのみを併べるからであります。又東洋の歴史の弊は虚らしひ事でも古書よさへあれば事實の様よ書くことです。例へば人身蛇首だとか天皇氏が一万八千歳だとかヘツタクレだとか如何にも事實の様よ書くが此等の「傳へ言ふ」とか「と言ふ説もある」とかいふ様に書く方がよい。此事後世でも改らず例へて東華錄に今の清朝の先祖の事に神人がドウ

するとかいふことがあるが日本人が書いた清朝歴史の中
 よも其れが事實の様に書いてあるのは甚だ不都合な話し
 です。若しそんなことでも書かなければならぬのなら
 「清朝人が言ふに云」といふ様なことを書き添へておかな
 ければなりませぬ。

また評語想像語などいふことも東洋の歴史にはありませ
 ぬ例へば「蝶が飛んで塙を越る」といふふとと書くに「花
 がある」と見わた」と言ふとか塙を越る譯がよく分る様に
 なります。其の事に付ては一つの證據と言ひます。歌陽
 修が五代史と書いた時に客をしたところが其の時に馬が
 飛び出して犬を蹴殺したと云ふことを文に書きつこをし
 た所が皆な字數が多い。歐陽修はそれが書けば、タツタ
 四字でよいと言つて「逸馬斃犬」と書いたと云ふが其の時
 に居た奴は皆な阿房な奴だったと見わた感心したと思ひ
 ます。歴史を書くにそんなツモリで書いてはいかあ
 若し本當に書いたなら想像語で「馬がかけ出す拍手は犬
 が来て塙の所で犬が逃ることが出来なくて蹴殺されて死
 んだ」とか何とか云ふ風に書いた方がよいと思ひます。

また東洋の歴史は人の事ばかりで無形の事を記するのは
 甚だ短所で其れを書くことは少ない。例へば王代の時分
 の事若し西洋人が書いたならば「此の時に當りてや朝廷
 から派遣した國守は名目のみで田舎は地頭といふ様な
 名目で人を撰み権力がひびく世襲になつた」とかいふ様
 なことを書くとい章ぐらい立派ならうが今までのよそ
 んなのはありませぬ。外史なども「外史氏曰」といふより
 外にはさういふことが書いて無い。これは早く言ひます
 と無形のことを歴史の本体に書くことが足りないものであり
 ます。且つ東洋要史は人によつて事を記することは知つて
 居るが事によつて人と記することは知らず例へば人曆は
 和歌よ長じて居る人ですが日本の人なら「人曆卒す人曆
 は石見の人和歌よ長す」と書くでせう。若し西洋人なら
 「此の時よ當り天下の士人大いよ和歌を好み有名の歌人
 出でた、柿本人曆の如きも其の一人である」と云ふ如き
 語勢よ書いて其れから人曆の傳を書き或はまた「此の時
 に當つて柿本人曆和歌を以て世を風靡した」と云ふこと
 を書いて其れから死んだことまで書くでせう。これ等の

ことは東洋人と西洋人で第一着目が違ひます西洋人は事に因て人を記する人も人に因て事を記するにもよく大体に目と附ます

また其の次ぎに言ふことは東洋の歴史の弊は文章がチギレチギレになつて居ることです十八史略でも國史略でも圈と打つてはチギレチギレよ書いてありて少しも記事の順席なき事ありこれ等は續いたものを書いていかるればなりませぬ 續けて書かなければなりませぬ

今一つは事の大小を知らないことです小事を長く書いて大事を短かく書いてある事があります 私は明治新史とかいふ本と見たところか征韓論で參議等が辭職したときのことと「陸軍大將西郷隆盛參議江藤新平職と辭す」とか書いてあるだけで外に何にも書いて無くさうかと思ふとドコドコの十五等出仕誰やらが命を奉じて香港に往つたと云ふことが委しく書いてありました マルで提灯ふ鐘で其れもポンチなら宜からうがドウも歴史にはいけませんぬ

歴史家の原因と結果をやかましく言ひますがこれは云ふ

までも無いことです

また今一つ進んで申すと東洋の歴史は風俗人情の變遷と書いて無いことですこれに付ては西洋でも論がありましてシーレーと云ふ人は歴史を政事史と見て何のことでも歴史に書くのはいけない 子が生れ其の子が年を取るゝ細君を持つると子が出来其の子には家を立てゝやればよい何よも家をつぎたしてやるよ限りはしないと言ひました其の通りで衣服史植物史といふものを拵へればよいが其れよしても大休の時勢を顯はす丈は書なければなりませぬ又イヤニ大義とか名分とかに拘泥して戰國の末に周をどは有るか無いか分らない位いなものを春王の正月など、書くのは誠に分らない話し 國の模様の大體よ付て一部の歴史を著すと云ふ様なことの無いのもこれも東洋歴史の短所です又東洋歴史では表も顯はれざる事は如何なる人物の働きも之を埋没して記さゝる事多し例へば佐の天海新井白石の徳川氏に於る其功勞を詳記したるものを見ず此等は大きな短所とす此外歴史に付ては猶細密と論ずべき事あれども今日は唯、其大綱のみを申

します

大層時が長くなりましたがまだ言ひ残しもありませうし
また間違ひの廉もありませう 若し間違ひがありましたら
皆さんで御討議下さって其れと書いて私の所へ送リ
下さる様お願いです 謹んで諸君が静かにお聞き下さッ
たのを謝します

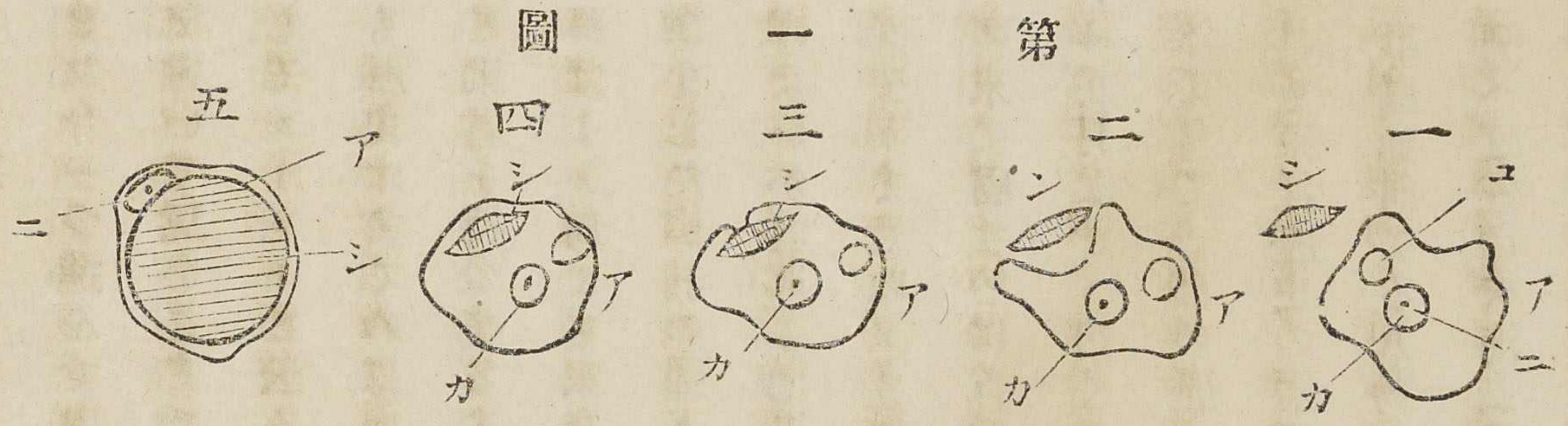
アメーバ (Amoeba) 及び動物ノ卵

在獨乙國 フライベルグ 理學士 石川 千代松

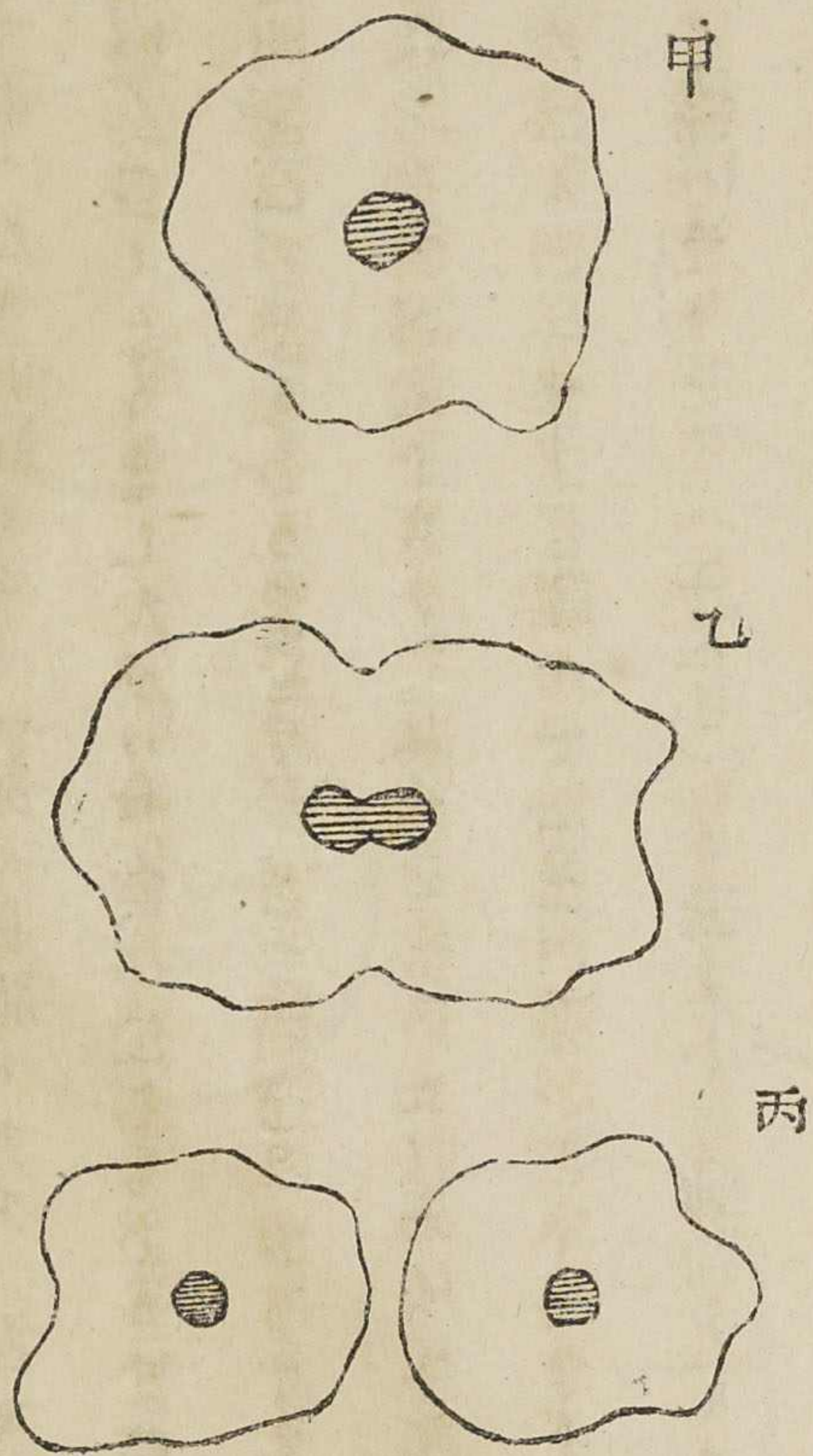
茲ニアメーバト稱スル動物アリ其全体ハ原形質 (Proto-
Plasma) ヨリ成立スル一ツノ細胞ニシテ其中ニ圓形或ハ楕圓
形ナル心(第一圖カ)アリ之レヲ細胞核 (Nucleus) ト云ヒ核
ノ中ニ又小キ粒狀ノモノアリ細胞仁 (Nucleolus) 第一圖ニ
ト云フ、此ノ動物ハ最モ下等ナル者ニシテ其成リ立甚ク簡
單ナレハ上ニ述ヘタルモノ、他ニ別ニ構造ト申スベキモ
ノナシト云フテ宜シカルベシ、只此他原形質中ニ收縮胞
(Contractile vacuole) 第一圖ニト云ヒ人間其他ノ高等動
物ニアル腎臟ト肺臟トチ一所ニシタル様ナル働キチナス

モノアリ此ノ胞ハ膨脹シタリ收縮シタリノ其フクレル時

ニハ体内ノ排泄物カ茲ニ溜リ來リ、チ
ママルキニハ之レヲ体外ニスツルナ
リ、又此アメーバハ始終其体ヲ動カシ
或ハ其一部ヲ少々出シタリ又引込マ
シタリス、其食物ヲ喰フ方法モ亦中々
面白キヲテ有マス、然シアメーバハ口
チ有セス口ノ無キモノカ食物ヲ食フ
ト云フト妙ニ開ユレモ此動物ハ立派
ニ食物ヲ食ヒマス、其レハド―ダト
云フコ、其体ハ前ニ述ル如ク玉子ノ
白味ノ様ニシテ全ク流動体、テモ無ク
又固形体ヲモ無ケレハ已ノ好キ自由
ニ体ノ形狀ヲ變スルヲカ出來ル故、
食物ヲ食フト思ヘハドコカラデモ構
ハス體ノ中ニ包ミ込ムナリ此チ一寸
圖ニテ示セハ(第一圖)(一)ニ(ア)ナ
ルアメーバト(シ)ナル食物アリテ此



第二圖



ノアミーバカ(シ)ヲ食ハントスルト先ツ(一)ニ於ルカ如ク自身ノ體ヲ突出サセ漸ヤト是ヲ包ミ始メ(二)(三)(四)ニ來リテ全ク此ヲ己ノ體內ニ入レ、后チニ消化シ、其ノ殘ル所ノ不消化物ヲ又ドココカラデモ構ハズ外ニ出スモノナリ、自分ノ體カコンナモノ故時ニヨルト隨分自分ノ體ヨリ大ヒナルモノヲ食フコトモ出來マス(五)只自分ノ體カ極テ薄クナリテ食物ヲ取圍ミサヘスレハ宜シキ譯ナリ、コンナ下等ノ動物テモ只無暗ニ涌キ出ルト云フ譯ニハ行カヌモノニシテ、矢ツ張我々ト同ク前ニ居ルモノヨリ來ルモノナリ、然シ茲デハ雌雄ノ別ナク又卵ト云モノモナシ、シテ其生殖スルト云ハ實ニヤサシキコトテ只其體カ

二ツニ別レサヘスレハ宜キコトナリ、第二圖ニ示スカ如シ然シ茲コ少々カシキコトハ人間ナレハ親カ子ヲ産ミ、子カ孫ヲ産ミシテ漸ヤツマヒテ行キ、ダン々々死テ行キ、モ一八九十ノ老人カ産チスルコトハ先ツ聞タコトモ無キ程ナレトアミーバテハツデーナシ、ナゼナレハアミーバハ二個ニ分ル、前ハナルホド親ノ體ナレトモ分レタル后ハ二個共全ク全シ様ニシテドツチカ親カドツチカ子カ區別スルコト誠ニ難シ、此二個共又段々生長シ更ニ二個ツ、ニ分離シテ四個トナリ、カ様ニシテダンダン蕃殖スルモノナレハ今日下谷ノ街渠ノ底デ分離シテ居ルアミーバモ大昔カラ茲ニ住ヒ居リ幾萬度分裂シタルモノナル哉モ知リ難シ」アミーバト同シクヤハリ一個ノ細胞ヨリ成ル動物ニシテインフウゾリア(Infusoria)ト云フ動物アリ此動物ニテハ二個ノ動物カ相互ニ接スルコトアリ名ケテ(Conjugation)ト云フ、最モ新ナル研究ニ依レハ二個ノ動物カ接スルニハ其合一スル者ハ只タ胚點ニアリテ胚胞ハ(Conjugation)ニハ少シモ關係セス、胚點ハ一度ヒ合一シタル后又タ分

レ其一部ハ新キ胚點トナリ一部ハ胚胞トナル、古キ胚胞ハ動物ノ (Conjugation) ノ后消失ス、 ("Der Conjugations-

process bei Paramacium Aurelia" - Von Dr. A. Gruber,

Professor der Zoologie in Freiburg i. B. Berichte der

Naturf. Ges. Zu Freiburg i. B. BdII.)

淡水ノ池溝ニヒドラ (Hydra) ト云フ小キ動物アリ此動

物ノ形チハ小キ囊ノ様ニシテ其口ノ周邊ニ五本、六本、或

第三圖

ハ八本ノ手ノ様ナルモノ

ヲ具ヘ此ヲ以テ他小虫ヲ

捕ヘテ食ス (第二圖) 此虫

ヲ驗微鏡ニテ見ルト体ハ

二葉ノ皮ヨリ成リ各葉ハ

前ニ述ヘタルアメーバノ

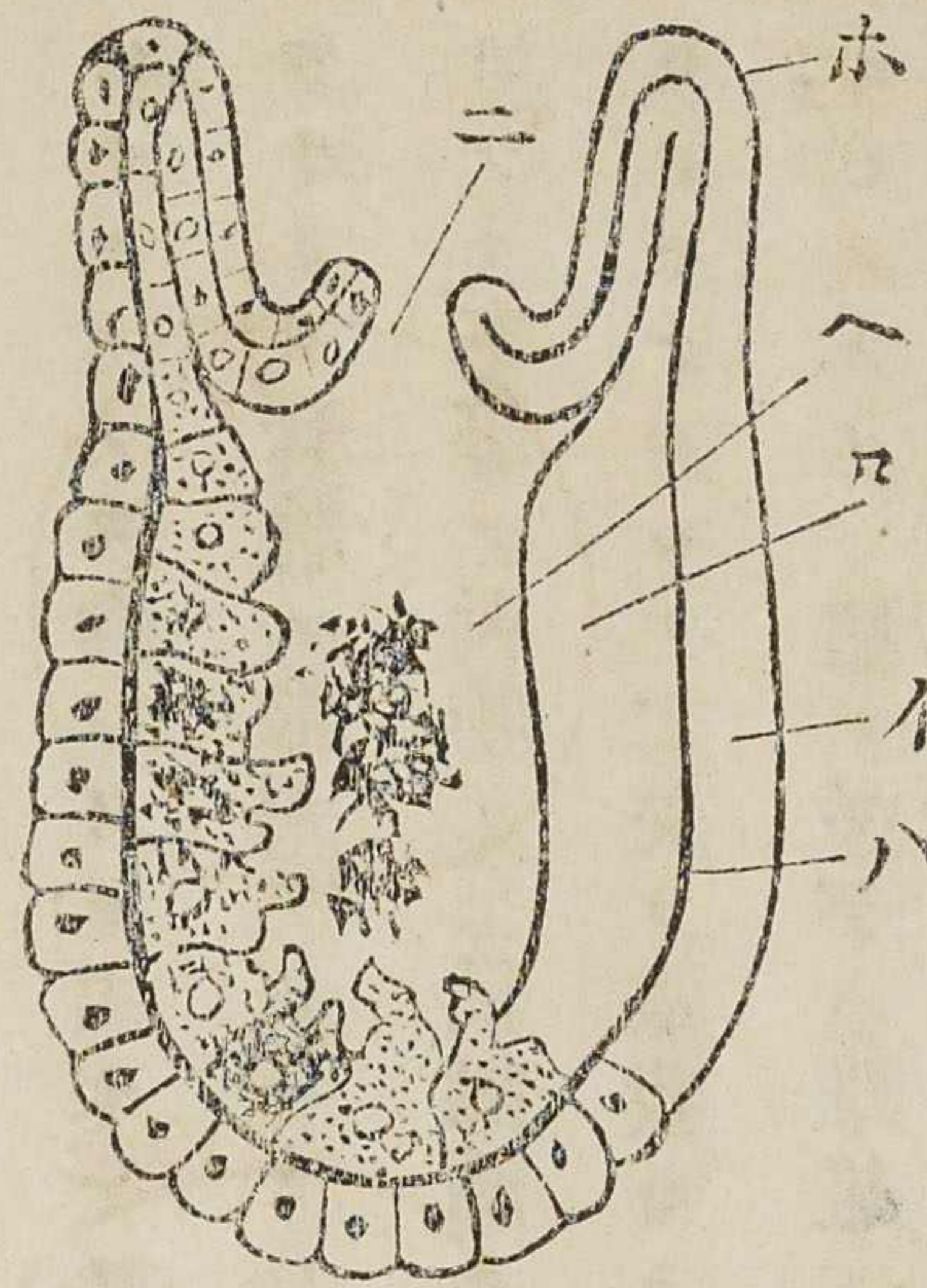
様ナル細胞ヲ澤山並ヘタ

ル様ナリ、第三圖ハ此動物ヲ縱切コシタルモノニシテ圖

中 (イ) ハ外面ノ細胞ノ層名ケテ外層 (Exoderm) ト云フ

モノ、(ロ) ハ内面ニ位スル層即チ内層 (Endoderm) (ハ) ハ

内外二層ノ間ニアル膜 (ニ) ハ口、(ホ) ハ手 (ヘ) ハ胃ナリ



此動物ハ (ホ) ナル手ヲ以テ水中ニアル小動物ヲ捕ヘ之ヲ

口ヨリ (ヘ) ナル胃ニ送ル此時胃ノ細胞ノ胃腔ニ向ヒタル

方ハアメーバ様ノ運動ヲナシ食物ヲ捕獲スルヲ恰モアメ

ーバノ如シ、(ロヲ見ヨ) 食物ノ不消化物ハ再ヒ口ヨリ外

ニ出ス、外層細胞ハ内層細胞ニ比スレハ漸ヤ堅固ニシテ

各々數個ノ刺細胞ト稱スル小形ノ細胞ヲ含有ス

右ノ如クヒドラハアメーバノ様ナル細胞カ澤山集リテ一

個体ヲナシタルモノト思フテ可ナルベシ、只其異ル所ハ

各細胞層カ皆互ニ同シカラスシテ各々異リタル形質ヲ具

ヘ異リタル職業ヲ掌リ相互ニタスケテ一個ノ動物体ヲナ

シ、其生命ヲ維持シ、各細胞ハ一々別々ニ生活シ得サルニ

アリ

モソツト登リテ魚ヲ見ルト此ヒドラヨリツツト込入テヒド

ラニ有ル様ナ細胞層カ種々様々ニ變化シ、内外二層ノ間

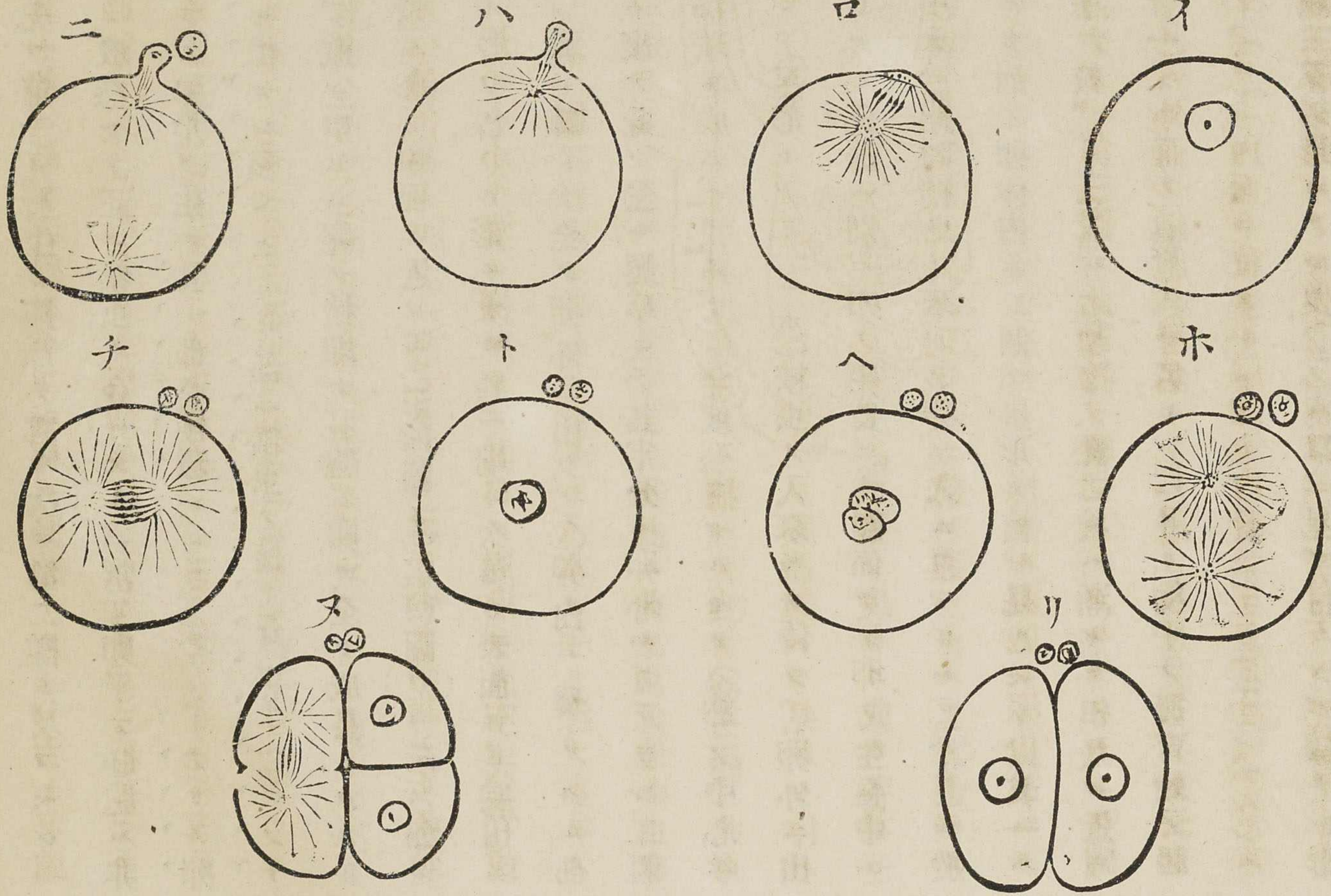
ニ新ニ一層ヲ生シ、一方ニハ運動ノミ用ユル筋肉モ出

來レハ、外界ニ感スル爲メニ神經モ出來、骨モ出來、皮モ

出來、皮膚ノ上ニ又々鱗モ出來シテ其混雜一通リナラス

、之チ人間社會ニ比ルニ野蠻人ト開化人ノ如シ、野蠻人

第四圖



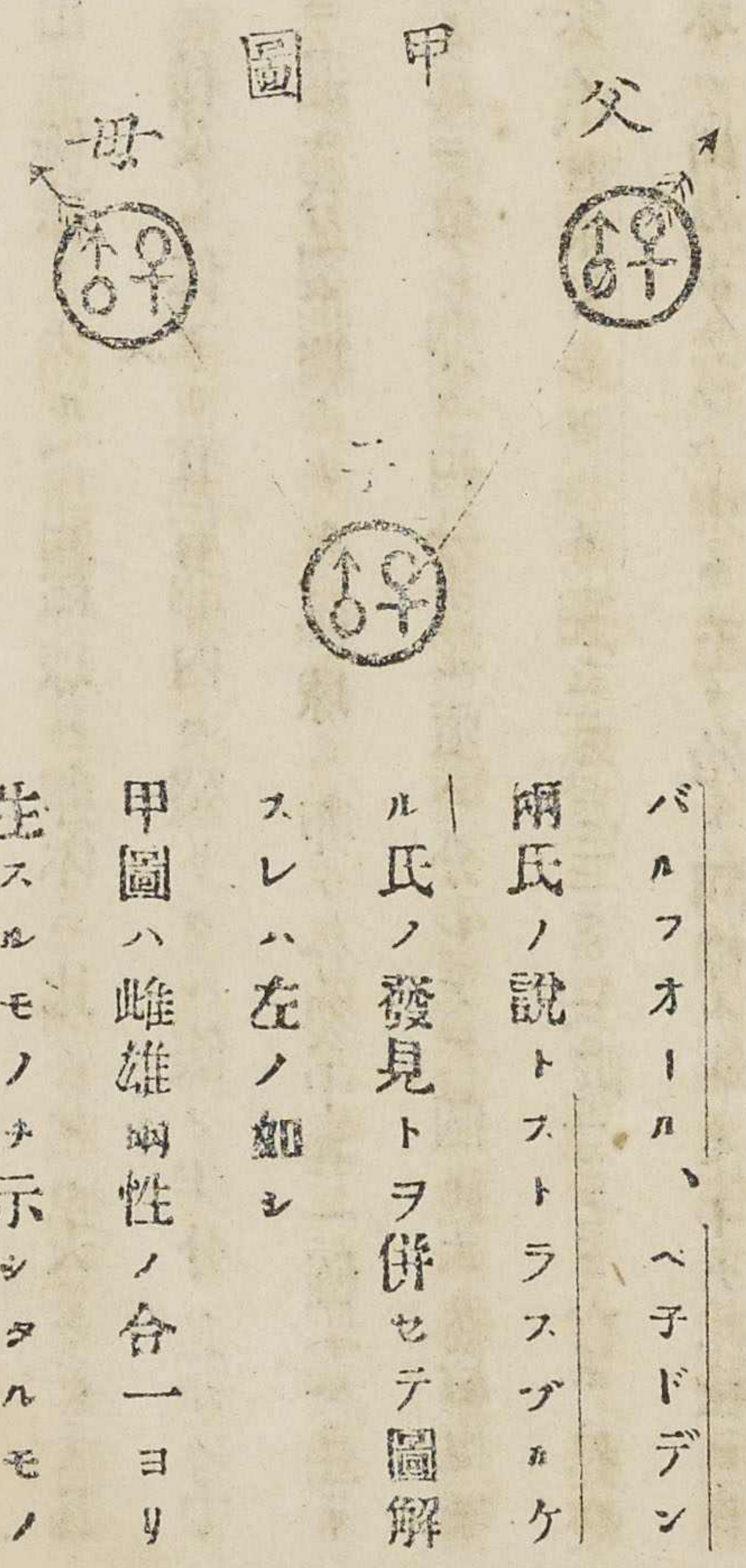
ハアメーバノ如ク何デモカンデモ一人一個テ致スニ開化
 人ハ多數集リテ一國ヲ成シ、百姓モアリ兵卒モアリ、菓子
 屋モアレハ餅屋、汁粉屋モアリテ種々様々コ手分チ致シ
 住スルコ恰モ高等動物ノ如シ
 アメーバハ一個ノ細胞ヨリ成立スル動物ニシテヒドラヨ
 リ人間ニ至ル迄ノ動物ハ皆數多ノ細胞ヨリ成立スル動物
 ナリ、動物學者ハアメーバ及ヒ此ニ類シテ一個ノ細胞ヨ
 リ成ル動物ヲ名ケテ單細胞動物ト云ヒヒドラ以上ノ動物
 ヲ多細胞動物ト云フ、多細胞動物ノ生殖ニ種々アリテ或
 ハ單ニ分裂シテ蕃殖スルコモアリ出芽スルコモアレ是
 レハ暫クサテ置キ其卵ヨリ生殖スルコニ付キ少々茲ニ述
 ヘント欲スルナリ
 動物ノ卵ハ皆前ニ述タルアメーバノ如ク一個ノ細胞ニシ
 テ其中ニ *Vesicula germinativa* (胚胞第四圖イ)ト名クル細
 胞核アリテ胚胞中ニ又タ一個或ハ數個ノ仁アリ名テ胚點
*Macula germinativa*ト云フ「卵ノ發生スルニニ様アリ、一
 ハ世人ノ能ク知ル所ノ雌雄ノ合一ヨリ起ルモノニノ一ハ
 雄性動物ナシニ雌性動物ノミコテ發生スルモノナリ、茲

ニ先ツ第一ノ發生ノ模様ヲ説キ次ニ第二様ニ及フベシ
 既ニ成熟シテ正ニ精虫ト合一スルニ當リ卵子ノ胚胞ハ非
 常ナル變形ヲ生シ其一部ハ極球 Polar bodies トナリテ卵
 外ニ出サレ殘リタル一部ハ精虫ノ核ト合一スルモノナ
 リ、概ノ申セハ卵ノ核即チ胚胞ハ卵カ全ク成長シタル所
 ニ當リ卵ノ表面ニ近ツキ(第四圖イ)第四圖ロニ示ス如ク
 タワラノ様ナル形ヲナシ其一端ハ次第ニ表面ヨリ突出シ
 始メ遂ニ離レテ全ク卵外ニ出ツ(ハ)卵内ニ殘リタル部
 分ハ復タ此ト全キ順序ニテ其半分ハ卵外ニステラレ二個
 ノ極球ヲ成ス(ニ、ホ、ヘ)今度殘リタルモノハ卵ノ中心ニ
 退キテ星形トナリ(ニホ)精虫ノ入來ルヲ待ツ、卵外ニ出
 サレタル極球ハ別ニ卵ノ生長ニハ關係ナク卵ノ生長中ニ
 消失ス、此時精虫ノ來リテ卵ニ入ルコトアレハ(ニ、ホ)ニ於
 ケルカ如ク卵体内ニ二個ノ星形ノ核ヲ見ルベシ、其一ハ
 卵子ノ核、一ハ精虫ノ核ナリ、此二核ハ漸々ト相互ニ近キ
 遂合一(ヘ)シテ一核トチ成シ、此ヨリ幼子ノ發育始テ起
 ル
 此核ハ又變形シテタワラノ兩端ニ星ヲ付ケタル様ナル形

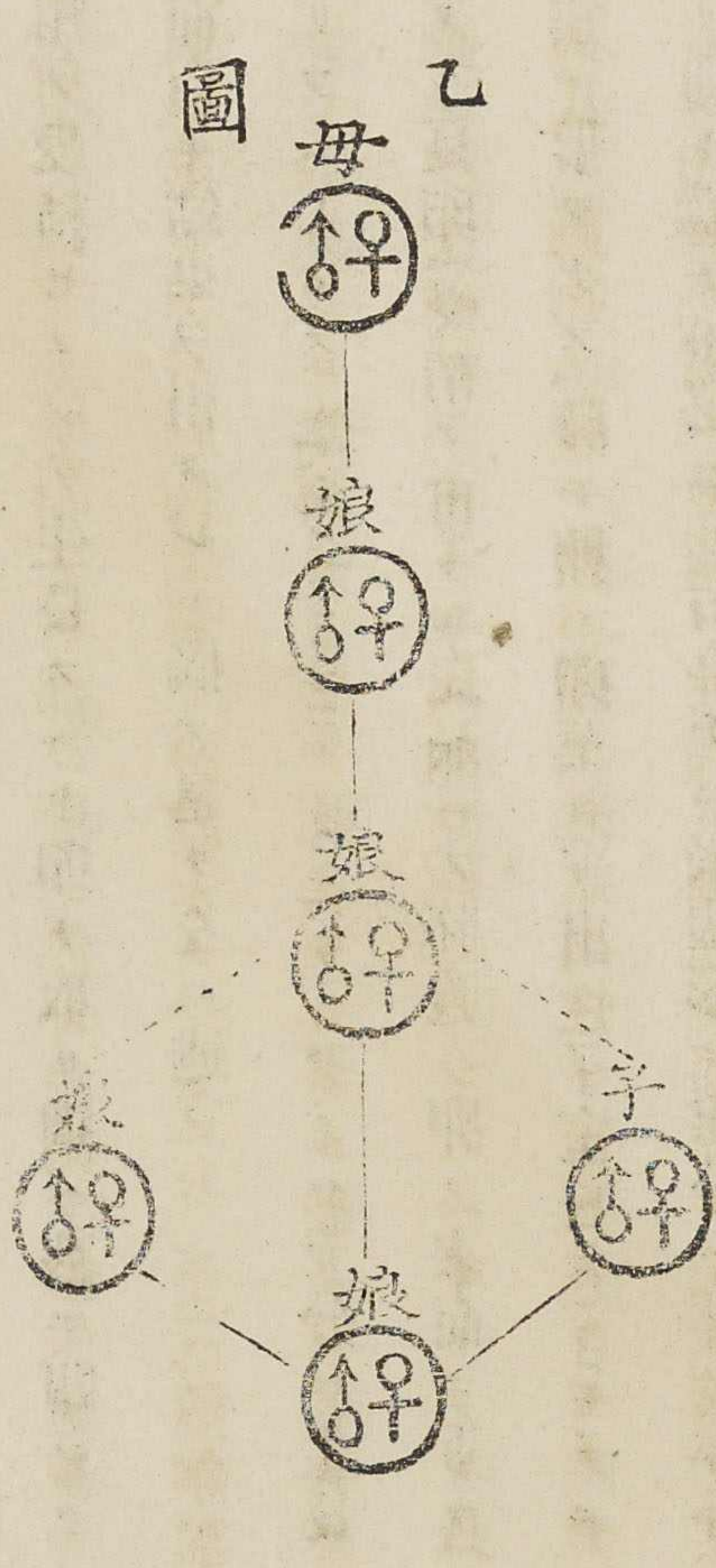
ト成リ(チ)其ノ真中ヨリニツニ分レ卵体始メテ分裂シテ
 二個ノ球トナル(リ)此二球ハアメーバニ於ケル如ク全ク
 ハナレバナレニナラズ互ニ相接シ居リ各又分レテ四個
 (又)トナリ八個トナリ十六、三十二、六十四トナリ終ニ桑
 椹狀ノ一塊ヲナスコ至ル
 諸テ茲ニ述ヘタル極球ト申スモノハ如何ナルモノナル
 ヤ、何故ニ卵ノ胚胞ノ一部カ卵ノ体外ニ出デ消失スルヤ
 ノ問ニ至リテハ動物學者ノ論說未タ、一定セズ三四年前
 ニフウィツツル氷河ヨリ落テ死去サレタル彼ノ有名ナル
 英國ノ學士バルフォール氏及ヒ碩學バン、ヘチーデン氏
 ノ兩氏ハ動物ノ卵ノ核ハ素リ雌雄兩性ヲ含有スルモノナ
 レバ其卵ヨリ出ル極球ハ核内ノ雄性ノ部分ナリト成シ之
 レヲ証スルニ節足虫類 (Arthropoda) 及ヒ輪虫 (Rotifera)
 ニ極球ナキヲ以テセリ
 諸テ此節足虫類ニテハ雌虫ノミニテ卵ヲ生シ幼子ヲ産ム
 モノ甚ダ多シ、其二三チ茲ニ掲テ示サンコ、茲ニ蚜蟲ト稱
 スル小キ六足蟲アリ此蟲ハ春夏ニハ只雌蟲ノミ有テ始終
 幼子ヲ胎生シ、秋ノ末ニ至リテ始メテ雄ヲ生ス此時ニ雌

雄交尾シテ産卵ス、卵ハ來春ニ至リ孚化シテ雌トナリ又雌蟲ヲ生シ秋ノ末ニ至ル迄幾代モ變リテ後雌雄ヲ生ス、即チ春夏ノ中ハ雌ハ雄ノ助ケナシニ始終生殖スルモノナリ、又水中ニ住ム小サキ蝦ノ類ニシテミジンコト稱スル動物アリ此虫ノ卵モ雌ノミニテ精虫ナシニ生長スルモノト雌雄交尾レテ生長フルモノトアリ、之レニ親類ナルアパスト云フ動物デハ雄蟲ノ出來ルヲ誠ニ希ナリト云フ

此等ノ卵ニシテ雄性動物ナシニ生長スベキ卵ニ於テハ未ダ極球ヲ見タルヲ無ク且ツ節足動物ニハ甚タ希ナレハ兩氏ノ説ハ誠ニ理解シヤスキナリ
植物界ニ少々見ルニ近頃ストラスブルグ氏ノ發見ニ因レハ植物ノ卵モ動物ノ卵ト全ク受精、卵子ノ核即チ胚胞ト花粉ノ核トノ合一ニヨリテ成ルモノニシテ數多ノ植物ニテハ卵ノ胚胞ノ一部カ卵ノ体外ニ出テ消失スルノミナラス、花粉細胞ノ核ノ一部モ胞外ニ出テ消失スルヲ明ナリ、
Neme Untersuchungen über den Befruchtungsvorgang bei den Phanerogamen etc Strasburger. 1884.)



甲圖ハ雌雄兩性ノ合一ヨリ生スルモノヲ示シタルモノスレハ左ノ如シ
バルフォール、ヘチドデン兩氏ノ説トストラスブルグ氏ノ發見トヲ併セテ圖解スレハ左ノ如シ



乙圖ハノプラムシ、ミジンコトノ如ク雌雄兩性ノ合一ヨリ生スル卵ヨリ雌性ノ動物ノミヲ生シ此ノ雌カ幾代モ雄性動物ナシニ生産シ終ニ又雌雄兩性ヲ生シ此ノ如ク輪順生殖スルモノヲ示スナリ、圖中○ハ卵ノ胚胞ニシテ其中ニアル↑○ハ雄性ノ分、○ハ雌性ノ分ナリ又↑○ハ卵外ニ出ルモノヲ示スナリ

グワイツマン氏ハ近年來頻リニ遺傳ノコニ付キ新ナル説ヲ出シ動物ノ卵子胚胞ハ成形部 *ovogene Kernplasma* ト生殖部 *Keimplasma* ト云フ二種ノ *Plasma* ヨリ成立シ成形部ハ卵ノ生長ヲ取扱ヒ生殖部ハ核ノ分裂等ヲ起シ幼子カ生長シタル后ハ再ビ生殖細胞ノ核ノ一部トナリテ次ノ代ニ傳ハリ萬古斷ヘスウツリ行クモノナリトス」

然シテ卵子ヨリ出ル所ノ極球ナルモノハ卵カ生長シタル后ハ不用トナレハ卵外ニ棄テラル、ナリ(卵ト云フハ分裂前ノコミノチ云フ)

バルフォールベネーデン氏ノ説ニ依レハ雌虫ノ卵ノミコテ受精セスニ幼子ヲ生スルモノハ極球ヲ出スヲ無シ何ントナレハ極球ハ卵核中ノ雄姓ノ部分ナレハ茲ニテハ別ニ雄ノ來ル所無キ故之ヲ出シテハ幼子ヲ生スルニ少々困難ヲ起セハナリ

グワイツマン氏ノ説ニ因レハ動物ノ卵子ハドノ卵子コセヨ皆同様ニ成形ト生殖ノ二部ヲ含有スル核ヲ有スレ其其二部ノ量ニ差アリテ雌雄ノ別ナクン生スルモノノ卵核ニハ生殖部ノ分量ハ成形部ノ分量ヨリ多ケレハ雄性動物ヨ

リ別ニ生殖部ノ來リ入ルコトナシト雖ヘモゾンニ發育スルモノナリ又受精シテ發育スベキ卵ニテモ固ヨリ生殖部ヲ含有スレハ受精セスモ幾分カハ發育スル者ナリ、此ノ事ハロイカト氏ノ蛙卵ニ於ケルオエラッヘル氏ノ鶏卵ニ於ルヘンセン氏ノ哺乳動物ニ於ケル實驗ヲ以テ明ナリ

余ハ近頃余カ師ウワイツマン先生ニ從ヒ共ニミソコノ類ノ受精セスシテ生長スヘキ卵ヲ取り調ヘ茲ニ關シタル面白キ結果ヲ得タレハ摘テ是ヲ左ニ述フ

ポリフェームス (*Polypheumus oculius*) ヲテハ充分ニ生長シタル夏卵(受精ス可ラサル卵)ノ胚胞ハ卵ノ表面ニ近キ米俵ノ形ヲナス、時ニ卵ハ卵葉ヨリ出テ子室 *Bridarium* ニ入り薄キ膜ヲ分泌セシ后直チニ米俵形ノ半分ハ卵ノ体外ニ出テ極球トナル、此極球ハ卵体ニ比スレハ大ニシテ其中ニ核及ヒ仁アリ其后卵内ニ殘リタル俵ノ半分ハ卵ノ中心ニ退キ分裂核トナル、極球ハ卵ノ分裂中其一極 (*Animal Pole*) ニ位シ卵カ四分スル頃ニ分レテ二個トナリ后直ニ消失ス、ピト、レフェス (*Bythotrephes longimanus*) ヲテハ極球ノ出方ポリフェームスト殆ト同様ナリモイナ (*Moina*

Paradoxa) ノ極球ハ卵カ卵巢ニアル頃ニ出テ卵カ子室ニ
 來ルキハ既ニ卵ノ表面ニアリテ分裂核モ既ニ卵ノ中心ニ
 位ス、レプトドローテ (Lectodora) ニテハ卵ノ表面ニ極球ヲ
 見タレモ未タ俵形ノモノヲ見ス、ダフニア (Daphnia longi-
 ispina) シダ (Sida) ダフ子テ (Daphnella) ニテハ明ニ極球
 ノ出來方ヲ見タリ

右ノ取調ニ因レハ受精セスシテ生長スル卵ニモ極球即チ
 卵ノ胚胞ノ一部カ卵外ニ出ツルコトヲ見レハバルフォール
 ベネーデン兩氏ノ說少々不都合ヲ生スルモノナリ

箕作佳吉曰石川氏論文ヲ讀ムニバルフォール氏ノ說
 ニ就キテハ石川氏ニ於テ少ク誤解アルカ如ク覺ユ

(Vide Balfour, Comparative Embryology Vol. I pp. 623

Edition of 1880) 併シヴロイスマン及ヒ石川兩氏ノ

研究ニヨリテ受精セズシテ發生スル卵ニ極球アリタ
 レハバルフォール氏ノ說ハ到底保ツ可ラズ同氏ノ其

說ヲ出セシ時ニハ未タ此事實ハ判然セザリキバルフ

ール氏モ受精セズシテ發育スル卵ニ極球アレバ余

カ說ハ實ナラズト自ラモ述ベラレタルナリ

○ 地文學講義第六回(第一次)

明治十九年五月十四日東京上野教育博物館ニ於テ講

述セシ大要

地變力第二(大陸ノ隆起、陷沒)

理科大學教授 小藤 文次郎講述

岩石圈ニ就キテハ講談モ最早ニ席ヲ重子ツレハ諸賢ノ欠
 伸ハ如何ニト思ノ外御心カケ厚ケレハ先ツ安堵シテ本日
 又モヤ講演セント思ホユル問題コソ、他ナラテ直ク前回
 ニ糸口ヲ解キシ地變力、即チ地上ニ三大不識議ノ一項ニソ
 アル

却說地變トハ地球ニ付キ伴フ諸ノ力、カ外部ナル岩石圈
 ニ働ク其反應并ニ其結果ニ化學的、物理學的ノ總合作
 用ノ外ナラス、本日ハ其地變ニ關スル第二項ヲ演ヘント
 ス則チ其内ノ一欸ハ

第二十四段

大陸ノ昇降(滄桑ノ變)(Bradyism)

飛川、昨日ノ淵ハ今日ノ瀨ト變ルハ浮世ノ習ヒナレト、

生物世界ハ儲蓄キ死物ナル岩石世界ニモ之ニ劣ラサル變遷アリ、見ラレヨク太古ノ亞細亞洲ハ今日ノ亞細亞ナラス、日本ノ東ニ渺茫タル太平洋モ、往古ノ太平洋タラサリシ而已ナラス、今ハ水面ニハ見エサレト古大平陸爰ニ存居セシトノコナリ、又經典ニ名高キアダム并コイブ夫婦ノ安息セシ極樂園(Paradise)ハ當時ノ地圖ヲ伸舒シテ索求スルモ見當ラサルハ抑々道理ノ存スルアリ、該地ハ印度洋底ニ沈ミ、歐亞航海ノ船舶、彼ノ舊國ノ上ヲ駛行シ夢ニタモ悟ラサル所コナリ、之ハ僅カニ一例ヲ示スノミニテ斯ク地上到ル處、或ハ上リ、或ハ降リツ、アリテ、常ニ絶へ間ナシ、我日本國ト雖モ均シク其土地範圍内ニアリ、其詳細ハ再ヒ下文ニ論セントス、之ニ先タチテ土地ノ隆起陷入ノ徵候ニ就キ數言ヲ費シテ可ナルヘシト思惟セリ

隆起ノ證 内地ニ於テノ昇降ハ、之ヲ發見スルコト確實ナル地形測量ニ據ラズンバ觀察スルコト極メテ難シ、然レモ海邊ニ於テハ其事業容易ナリ、總テ海邊ノ淺キ所ハ多少其地方上昇ノ徵ニシテ、若シ其近隣ニ河流ノ注入ス

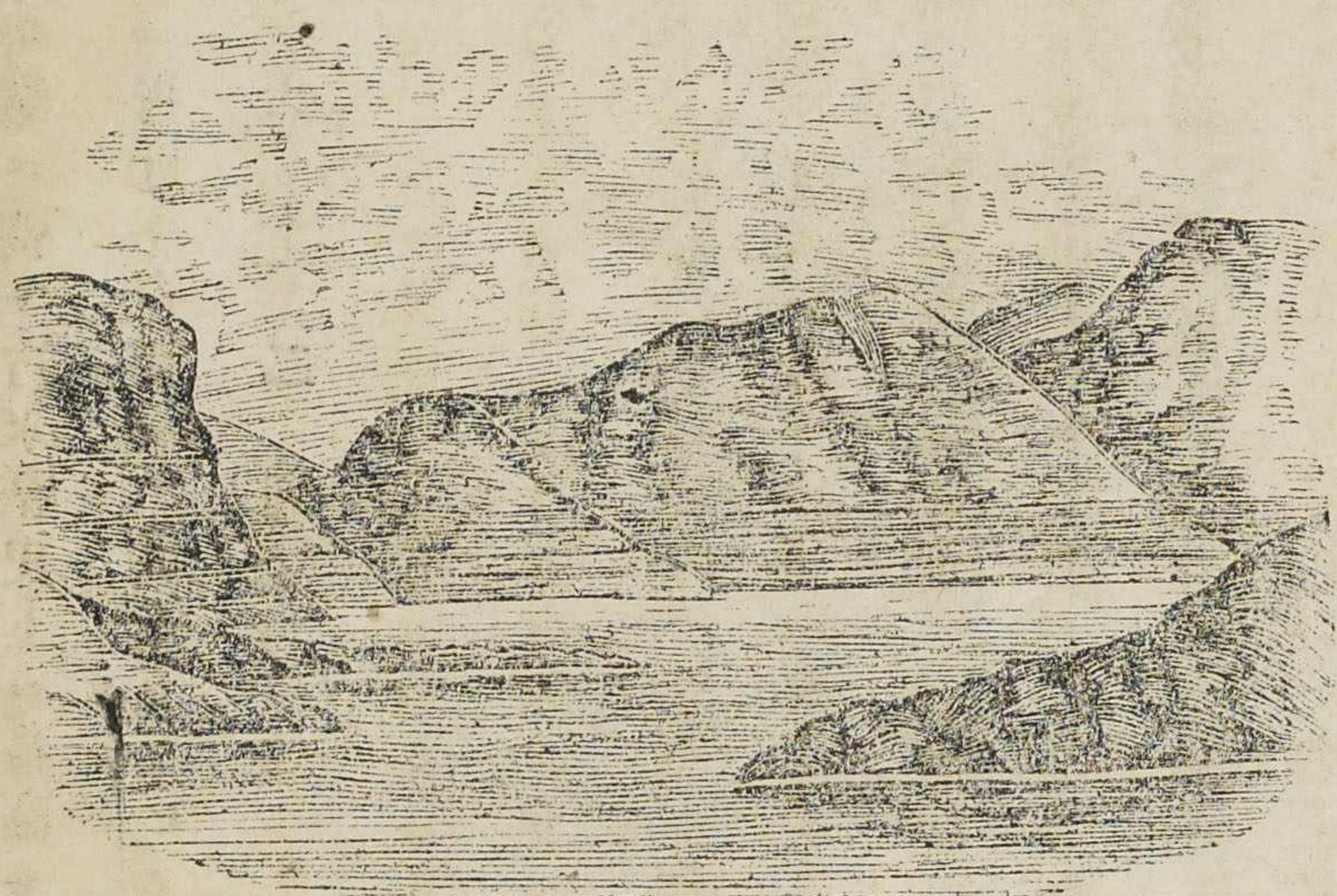
ルアリテ土砂ヲ漂流スルニモセヨ、其沈澱物ハ河口近傍ヲ限リ堆積スル而已ニ止マリ、近海一般爲メニ淺瀬ト變換スルコトナシ、此ノ的例ハ近キ東京灣ナリ、又河口ニ三稜洲アリ阿弗利加ノナイール川、又我カ大坂地方ノ如キハ是亦上昇ノ特徵ト爲スヘシ、海岸數丈ノ所ニ海砂アリテ介殼珊瑚ノ遺骨等ヲ含ムコトアレハ其地既ニ隆起ノ表證スルモノナリ、古記及ヒ航海者ノ口碑ニ傳フル事蹟モ全ク廢棄ス可ラス、學術上ノ觀測ハ平均水準標ヲ四近ノ岩石ニ記刻シ、數年ノ後再ヒ其位置ヲ見レハ昇降ノ比例判然タルヘシ

陷入ノ證 陷入ノ證蹟ヲ求ムルコト上昇ヨリモ困難ナルハ其特徵水中ニアリ隱沒スレハナリ、前條既ニ水準標ニ就キ一言セリ、其標ニ由リ地方沈底ノ一斑ヲ窺ヒ知ルヘク、又斷崖絶壁、浪蕩陸上ニ飛奔スル所ハ、概言セハ該地方降下ノ徵ヲ表示シ、又海邊深淺ノ甚ク不規律ニシテ深處所々ニアレハ下降シツ、アリト知ルヘシ、上昇スル地方ハ三稜洲ヲ生スレモ下降ノ地方ナル河口ハ三稜口トナリ、沈下スルニ隨テ愈々河口廣濶トハナリ又水中ニ

森林アリ、若クハ海中ニ泥炭ヲ多量ニ産シ、其他古宇ノ水

ニ示メセル第六十圖ノ如ク波ノ侵蝕セシ所ロニシテ嘗

第十六圖



森林アリ、若クハ海中ニ泥炭ヲ多量ニ産シ、其他古宇ノ水中ニ孤立スルコトアレハ皆沈降ノ徵候ナル多シ

昇降ノ徵候タル甚々煩雜ナレハ、茲ニ揚ケシハ大意而ハ

ナリ、之レヨリ隆起ノ的例其著シキモノヲ舉ケヌヘシ、聞

クカ如クハ諾耳威及ト瑞典兩國ノ(南部ヲ除ク)沿海ハ水

面ノ變換著シクシテ、海岸ノ斷崖ヲ目渡セハ水面上自五

六十メートルノ上ニ水平線ノ跡ヲ殘スト云フ之レ則チ左

ニ示メセル第六十圖ノ如ク波ノ侵蝕セシ所ロニシテ嘗

テ浪濤ノ爰ニ達セシコト明瞭ナリ、又此ノ水平跡ノ處ニハ

砂礫堆積ニ稍、平地アリ、海栖ノ介殼ヲ埋藏スルコトハ皆

浪濤ノ爲メニ打上ラレ、爰ニ殘存スルモノナリ、斯ノ如

キ例ハ常陸勿來關^{ナコソ}四近ニ多シト云フ、典瑞部府ストクホ

ルム四近ハ特ニ隆起顯著ニシテ、百年前ニ水準標トシ

テ岩石ニ彫付セシ記号ハ今ハ既ニ三尺六步程水平上ニコ

リ、之ニ反シ其ノ南部、即チ獨乙ニ近キ所ロハ漸々沈ミ

ツ、アリ(第六十一圖ヲ見ラレヨ)

蘇枯蘭ノ東海岸ニハ地臺(Raised beach)恰モ諾耳威ニ於ケ

ル如ク所々ニアリ、數級ノ階段狀ヲ爲シ、下段ハ最モ新

紀ニ屬シ、當時ノ水面ヨリ三十尺、上ニアリ、沿海ニ棲息

セル動物ノ遺殼ヲ埋藏シ、其ノ稍々上段ノ地臺ハ水準上

自尺ニアリ、爰ニ於テハ當時北冰海ニ生活セル動物ノ遺

跡ノミヲ埋没シ、左レハ此ノ上臺ハ古紀ニ屬シ土地上昇

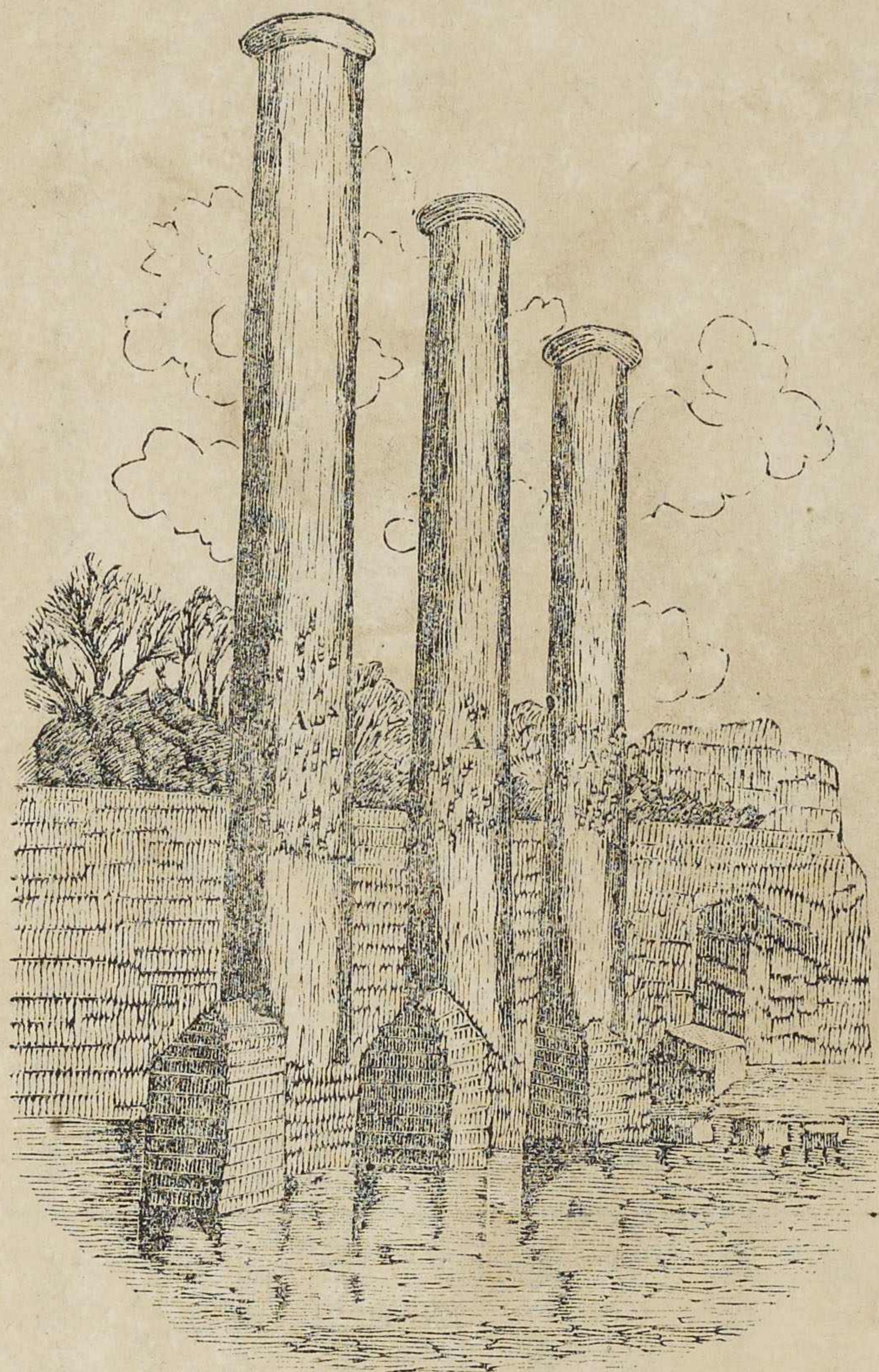
ノ古代ニアリシ實證ナリ、又南米ナル知里ノ海岸ハ二十

年間ニ九尺モ昇リ、其他意大利、壽江須地峽、錫蘭、新西蘭

島ノ東部、亞細亞ノ東部、中央米國等ハ皆其例トスヘキ

ナリ、蒼桑ノ變ニ就キ古來歴史上ニ名高キモノハ意太ネ
子ーブルスニ程近キ古宇コテ世ニセラヒスノ古堂ト云フ

第、六、十、二、圖



現今存スルモノ僅ニ灰岩ニテ作レル石柱二個ナリ、各々
水面ヨリ五尺ノ處マテハ無疵ニシテ滑カナレトモ其上ヨ
リ九尺ノ間圖中A、石喰介(Mediola Lithophaga)ノ跡アリ
嘗テ水中ニアリシ證ニナリ、及其上部ハ原ノ儘ニ柱面滑
カナリ、近代又々漸々下ニ沈ノ兆候アリト云ヘリ

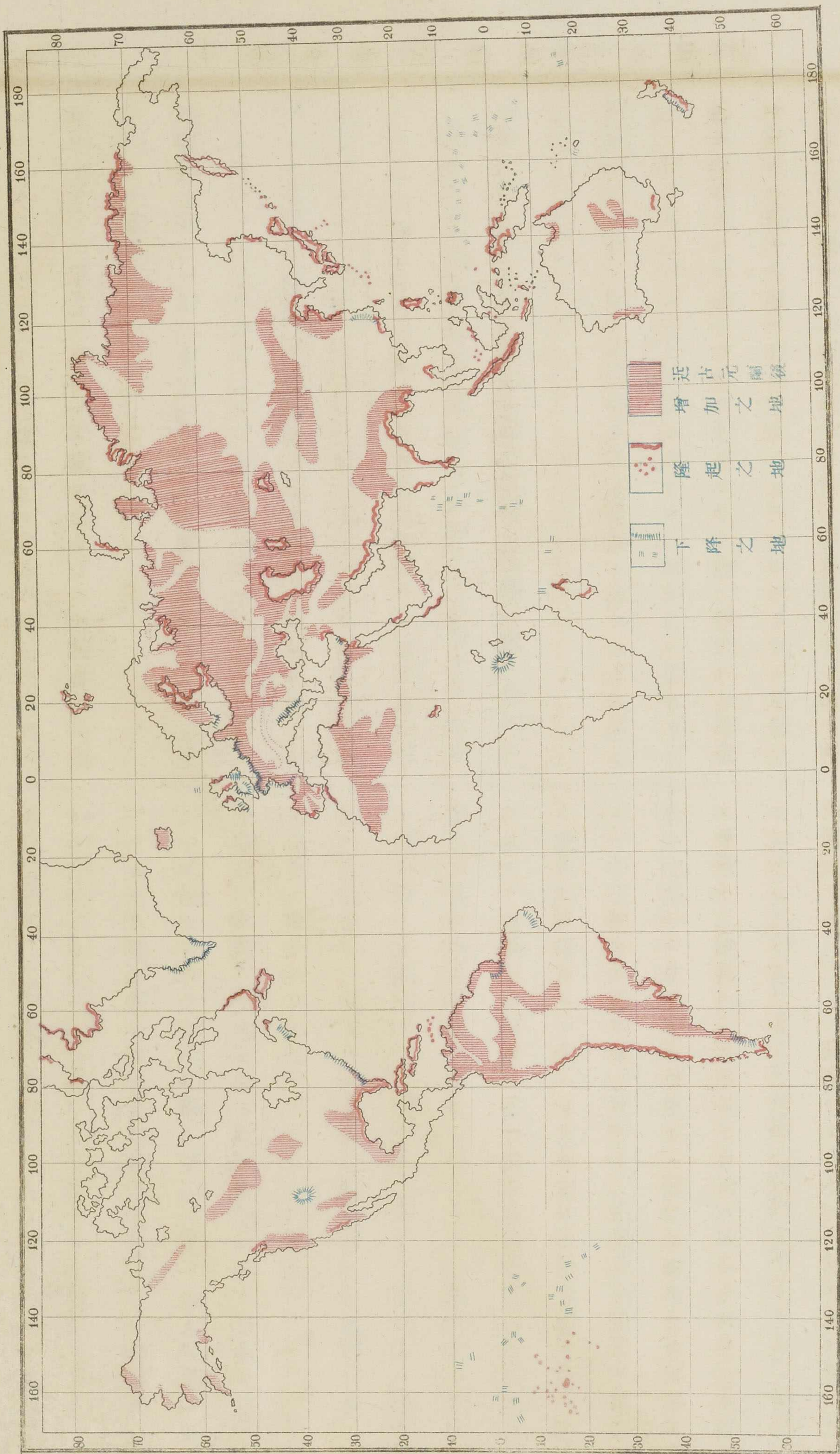
却説之レヨリ沈降ノ例ヲ舉クヘシ、然ルニ既ニ述ヘ申セ
レ如ク其徵候タル其證據トス可キモノハ水中ニ隠レ、人

目ヲ遠カル故ニ之ヲ探索スルヲ容易ナラサル爲
メニ極メテ不充分ナリ

今第六十一圖ニ示セル如ク英吉利ノ南部、佛蘭
西ノ北部ハ漸々降り、特ニ阿蘭陀ノ如キハ土地
海面ヨリ數尺卑キ故ニ海ノ侵入著シク、僅カ
ニ堤防ヲ以テ水ノ襲人ヲ禦クニ止リ若シ堤防崩
レハ同國而已ナラス、繼乙ノ一部并ニ白耳義モ

青海原ト約變スヘシ北米ノ東岸、南米ノマツン
河口等ニハ今ニ於テ海中ニ森林ノ跡アリ該地方
漸々沈ムノ徵トス可シ、又綠蘭ノ南部ニ於テ海
中ニ家屋ノ遺跡多キハ嘗テ陸地タリシ實證ナリ

西教書中ニ名高キ小亞細亞ノ死海、又裏海(Caspian Sea)
ノ水面ハ地中海ノ面ヨリモ數百尺斗リ下ニアリ、歐洲ニ
テ絶景ノ譽レアルロー都府アリ、小説仕組ノ演劇場ニテ本
邦稗史ノ鎌倉トモ稱ス可キ意太利ノベニツ府家屋ノ建築
ハ皆々海中ニアリ、街道ハ鹹水漲リ、輕舟(Gondola)ヲ以



テ往來ノ用ヲ辨ス、銀月水ニ映シテ風景清ク、情緒濃ニ過

ノ義解ハ本誌第六十一号ニアリ、同号ノ四十八圖ニ參照



テ往來ノ用ヲ辨ス、銀月水ニ映シテ風景清ク、情緒濃ニ過
 キテ時ニ少波瀾ヲ醸ス、歐洲ノ貴顯強富ハ此地ニ遊フチ
 最上ノ樂ト爲ス、其都府創始ノ際ハ其地陸上タリシモ漸
 ヲ沈底、遂ニ今日ノ有様トナリシモノニテ人此ノ地變ノ
 結果ヲ絕景 稱道セリ、全體アトリア海一般沈ミ其以前
 ニハ一ノ大亡國(Chirah)爰ニ存セリト地學者ハ論セリ、
 阿蘭陀ニモ右ノ如キ市街夥多アリ冬期ハ冰スベリ(Dkati-
 no)ニテ往來セリ

今第六十一圖ノ如ク地球全圖ニ沈降ト隆起ノ處ヲ色別シ、
 見スレハ、地反ノ升降狀態ヲ探知スルニ辨ナリ、見ラ
 レヨ、一方降レハ一方昇リ、互ニ損得相償ヒテ綠蘭島南部
 沈下スレハ北米ラブラドル近傍上昇シ、諾耳威瑞典隆起
 スレハ北獨乙、阿蘭士、佛蘭西モ陷チ入り、本邦北岸下レ
 ハ太平洋ニ面スル南岸上リ、互ニ相平均セリ
 却說以上述ヘシ如キ蒼滄ノ變タル人間此世界ニ出顯爾來
 ニ限ルニ非ラス

地學上(Geologically)前代ノ時紀ニ際シテモ其變動特ニ著
 シカリシカ如シ、向ナレハ太古元(Paleozoic era)(地學時代

ノ義解ハ本誌第六十一号ニアリ、同号ノ四十八圖モ參照
 アルヘシ)石炭系ノ下部ハ石灰岩、重層ヲ成シ海栖動物ノ
 遺殼アハモ挿炭部ハ砂礫層ヨリ成リ、陸栖植物爰ニ繁茂
 シ、遂ニ石炭ト化シ今日有用ノ燃料ト爲ル、其上ニ横タハ
 ル重層ハ二疊系(Dyassic System)苦灰層ニテ即チ、大洋洋
 底ニ沈積セル岩石ナルヲ見レハ地勢ノ變革今日ヨリモ尙
 ホ一層著シキニ似タリ、地學上ノ近古元(Tertiary)爾來今
 ノ諸大陸ハ推ナヘテ云ハ、北ニ増加シ南東西ハ漸々沈ム
 カ如シ、其例トス可キハ細亞細ノ北西里亞ハ近時迄一面
 海水ノ蔽フ所ニタリシニ今ハ陸トナリ印度洋并ニ太平洋
 ハ漸々降ルノ傾向アリ(第六十一圖ヲ見ヨ)左レト此ノ原
 則ハ大綱ニシテ細カニ一地方ヲ探求スレハ本邦ノ如ク全
 ク反對ニ動クモノモ少ナカラス
 予頃日、本邦ノ土地昇降ニ就キ古記口碑ニ事蹟ヲ求メ少
 シク考出セシヲアリ桑田變シ碧海トナリ或ハ反對ノ變動
 アリシヲ述ヘ載セテ本誌第四十七号ニアリ茲ニ再ニ述
 ベズ

地殼昇降ノ考說 考說トハ人ノ思考ナレハ面相ノ不

同ナル如ク思想モ人ニ由テ然リ左ハアレ考説能ク事實ト符合セハ之ヲ天賦、天法又ハ自然ノ法ナト唱ヘ約墩ノ中心力達留因ノ生物變遷論ナトモ考説ト事實ト矛盾セサル故ニ今ハ人信憑シ學者之ヲ天津ト名ク斯ク考説ハ許多アレモ多數ハ陳腐説ニテ曩ニ(本誌第四十二號)予地震考説ヲ述ヘシ如ク土地ノ上下ニ於テモ考説一ニシテ足ラス然レモ之ヲ要スルニ三條ニ分ル則チ

(一)地熱説 岩石ハ加熱セハ膨脹シ冷氣トナレハ收縮ス

然ルニ地殼ノ材料ハ他物ニアラデ皆岩石ナレハ火山四近及ヒ地心ニハ之ニ加熱スル熱源アリテ砂岩ハ半里ノ厚

サニテ之ヲ華氏二百度迄ニ暖ムレハ十尺膨脹シ二十五里

ノ砂岩層ヲ八百度ニ暖ムレハ千尺乃至千五百尺ヲ増容ス

從テ寒ムレハ此比例ヲ以テ減縮ノ故ニ地層寒暖ノ不齊ナ

ルニ由リ一地方ハ上昇シ又ハ沈降スルトノ説ナリ

(二)等温説 地ヲ鑽下シテ數尺ニ達セハ四季無變ノ温熱

アリ愈々深ケレハ愈暖ナリ地上到ル處然ラサルハナシ浩

ル次第ナレハ各地ノ地下同温度ノ所ヲ想像上ニ連絡シハ

同温ノ線ヲ生ス之ヲ名ケテ等温線ト云フ左レハ同温線ハ

地上山嶽河海ノ崎嶇ニ準シテ凹凸スベシ今日地上ノ有様ヲ觀察スルニ氷霜雨雪ノ爲ニ高地ハ漸々減却シ河海ニハ土砂堆積シ而層千尺ニ達セハ華氏二十度ヲ増スヘシ之ニ從テ同温線ハ上ニ昇リ之ト全ク反對シ陸地ハ表層ノ消滅ニ依リ冷寒トナリ同温線卑ニ下ルベシ而シテ温度増加セハ岩石ハ柔ラカトナリ加之海中ニ積ミン地層ト水ノ重サノ爲メニ海洋ノ地殼ハ沈降シ陸地ハ輕ロクナリ隨テ上昇スルトノ説ナリ

(三)地殼收縮説 以上二説モ長シ短シニテ事實ニ恰モ好ク符合セズ今略釋セントスル第三説コソ實ニ近シ之ヲ地殼收縮ト稱ヘリ

抑々地球内部ニ就テハ議論多岐ニ分レ曰ク地心瓦斯體ナ

リト曰ク鎔汁體ナリト曰ク外心固體ニシテ中部液体ナリ

ト未ダ就カ是非ナルヲ知ル能ワズ今大文學ノ結果ニ憑

地球ノ過去ヲ遡求スルニ元ト地球ハ一個ノ火團ニシテ宇

宙ニ回轉ヒシモノナリト然リ而テ空間ノ冷寒ニ遇フテ始

メテ熔流体ト變ゼシ際其體質中心ノ周圍ニ凝結シ以テ形

ヲ成セシナラン爾後地熱少シク減シ外皮愈々冷結シ重疊

スルモ地心尙ホ盛密ニ加之地球ノ軸ハ自然短小トナリ地

スルモ地心尙ホ盪搖シ加之地球ノ軸ハ自然短小トナリ地皮未ダ薄キヲ以テ滑カナル地皮忽チニ縐褶シ其狀態恰モ橙子ノ腐朽シテ外皮縐ミ縮ミシガ如シ因テ地上ニ崎嶇ヲ生シ地皮側壓サレ隆起若クハ陷入スルトノコトナリ

近來歐洲ニ學者ノ一派起リ土地ノ隆起陷沒ハ外觀斯ク見ユレモ眞ニ然ルニ非ス水平点ノ變換スル而已ニテ其源ハ地球ト他ノ天体ノ關係ニ源ツキ種々引力ヨリ赤道ノ水量極ニ進ミ爰ニ堆高クナレハ極地方土地降下スルカ如キ觀アリ、是レニ反對セハ赤道地方沈下スルカ如キ狀アリ、又或ル學者ハ水準ニ就キ申セシ如ク大陸ノ海水ヲ牽引スルカニ依ルト想像シ地殼ノ縮小スルニ隨テ山ヲ生シ又火山爆裂ニ因リ沿海地勢ニ變換アレハ水ニ牽引力ヲ與フルモノ増減スルニ依リ隨テ水準ニ影響ヲ及ボスヘシトノコトナリ、人ノ知ル如ク氷界ハ地球ノ時代ニ隨テ處ヲ移シ或ハ南シ或ハ北行ス然レハ其固態ナル氷陸ハ矢張り前理ニ準シ水ヲ引付クヘキナレハ其四近全體水準ニモ變遷ナキヲ得ズ、故ニ土地ニ昇降アルカ如キ觀アルハ眞ニ然ラスシテ水面ノ上下スルニ源ツクトノ考說ナリ

○ 落語改良論

文學士 土子 金四郎

近頃ハ改良流行リニヤ種々様々改良々々ト云フコト、ナリタレモ其中ニモ曩ニ朝野有名ノ諸氏カ企テタル演劇改良ノ如キハ最モ大ナルモノニテ又實ニ有益ノモノナリ其主意ハ今更述立ルモ遼東ノ豚ヲ見ル様ナレハ茲ニハ省クベケレモナホ演劇ノ次ニ位シテ老若男女貴賤都鄙世間一般ニ樂ミトナフ寄席テフモノアリテ其中ニハ淨瑠璃、躍リ、手品、寫繪、ナド種々ノ藝曲アリト雖モトリワケ人々ノ最モ多ク樂シムモノハ落語ニシテ己カ思フトコロニテハ是等モ亦演劇ト共ニ改良センコト望マシキコトナリ、サリナガラ淨瑠璃、躍リ等ノ類ハ己カ今云フ限リニハアラズ又云フコト能ハサレモ落語ニ至リテハ日頃思フ由モアレハ之ヲ述ヘテ大方ノ諸賢ニ謀ラントス而テ茲ニ落語ト云フハ今日一般ニ用井ル文字故解リヤスキヲ專一トシテ論題ニ出シタルモノニテ夫ノ圓朝、燕枝流ノ所謂「人情話」又ハ續キ話トモ謂フ、并ニ圓遊、圓太郎派ノ所謂「落

シ話」ヲ總稱シタルモノト知ルヘシ

抑モ落語テフモノハ西洋諸國ニモ其比ヲ見サル一種我國固有ノ藝トモ云フベキモノニシテ西洋ニテモ小説ニ節ヲ附ケ身振假聲ヲテ讀ムコトアレモコレハ落語トハコト變リ其味モ遠ク落語ニ及ハサルモノアリ而テ小説ハ當時ノ人情風俗ヲ寫シ文章辭句ノ味ナドモアリテ面白キヲ限ナケレモ是ハ文字ヲ讀ミ得ル丈ケノ力ナクテハ叶ハヌコトナリ且又文字ヲ書キタル田舎言葉ヲ弁慶ガナ、キナタ流ニ讀テハチト味カ薄ク圓朝カ三寸ノ舌ヲ以テスル田舎者ノ假聲ヲ聞クニ若カスト云フ所アリ又演劇ハ「チヨボ」デ筋道ノ講釋ヲナシ眼ニハ其形ヲ見耳ニハ其聲ヲ聞キ實ニ眞物ヲ見聞スルコトナレハ面白キコト千萬無量ナカラ第一ニ仕掛カ大ゲサニテ見料カ高ク手輕ト云フ譯ニユカスノ雨夜ニシンミリト聞キ湯治場ノ退屈ハラシニ一寸滑稽ヲ催スト云フ工合ニ出來サル等ノ不便アリ然ルニ落語ニ至リテハヨク人情ヲ寫シ身振假聲何トナク現場ニ眞物ヲ見聞スルノ念ヲナサシメ言語ノ使廻シ音聲ノ出シ工合ナド小説演劇トハ又異ナリタル味アルトコロアリテ辨

慶ガナ、キナタ讀ミヨリハ一段ノ興ヲ添ヘ一寸手輕ニ催スコトヲ得中ニモ「落シ話」ハ一派特別小説演劇モ遠ク比ベモノニハナラサル面白味ヲ含ミ頓智頓才當座即席物ニフレ事ニサハリ滑稽片言ノ中ニ云フヘカラサル可笑味甘味ヲ澤山ニ含有シ實ニ此道ニ樂ムモノニ取リテハ尋常一席ニ述ヘ難キ位ナリ落語ノ何物タルハ前ニ述ヘタルカ如クニシテ蓋シ小説演劇ト其ニ夫々固有ノ味アリテ皆衆人ノ好ムトコロナリ其衆人カ好ム丈ケニ中ニハ之カ爲メヨカラヌ感覺ヲ起シヨカラヌ影響ヲ生スルコトナキニアラヌメ落語モ亦世教ニ關係ヲ有スルコトハ小説演劇等ト毫モ違ヒナシ且ツ前ニモ述ベタル通り落語ニハ小説演劇トハ一種別ノ面白味アルモノナレモ漸々聞入ノ氣風高尙トナルニ隨テハ夫相應ニ面白味モ亦高尙ナラサルヘカラス則チ冷飯澤庵ノ尻尾ヲ食シタルモノカ漸々「ビステキ」「カツレツ」ヲ食スルノ高尙ニ至レハ最早冷飯澤庵ノ尻尾ハ其味ノ薄キヲ厭フト一般ナリ然ルニ今日ノ落語ハ世教ニ害アリテ人心ノ高尙ニ連レズチト冷飯澤庵ノ尻尾タルヲ免カレサルトコロ少

ナカラス且其他己カ考ニテハヨロシカラスト思フトコロ
モアレバ須ラク改良スヘキモノナリ

今日ノ落語中第一着ニ改良スヘキハ猥褻ノ点ナリ是ハ落

語ニ限ラス小説ニシロ演劇コシロ皆同様ノコトナカラ落

語ニハ往々親子ニテハ互ニ面ヲ赤シ聞クニ堪ヘ難キ程ニ

テ樂シヨリハ反テ苦シムコトアリテ今日ノ落語家ハ大

抵猥褻ノコトヲ以テ人ヲ笑ハセル種トナシ人ヲ笑ハセル

ハ猥褻ノ外途ナシト云フ姿ナリ又人情モ猥褻ニトマメテ

サシ人カ面白ガルハ猥褻ニアリト定メタル様ナリ如何ニ

モ今日ノ下等社會(少々中等社會ヘモ及ブカモ知レズ上

等社會ハマサカ)ハ猥褻話ナラハ別ニ意味言語ニ面白味

ナク直ニ笑ヒ別ニ人情ノ深ク高尚ナルトコロナク頻

リニ面白シト感スルモノ少ナカラス此ニ於テカ大入ヲ目

的トスル落語家ハ大抵猥褻調ヲ用井ルモノニテ或ハ落語

家ニ罪ナキカモ知ラテト兎ニ角廢スヘキコトナリ然リ而

テ抑モ猥褻ノ宜シカラズシテ須ラク之ヲ廢スヘキハ別ニ

喋々ノ辨ヲ要セサルコトナレトサリトテ色情ニ關係スル

コトハ間接ニ直接ニ細大尽ク猥褻ナリトシテ一切廢スヘ

シトスル片ハ餘リニ窮屈ニナリテヨロシカラスト落語
ナドハ人ヲシテ樂マシムルモノニ通例ノ說教トハ少々

異ナリタルモノナレハ頭ヨリ尾マデ意見デ填マリタラフ

ニハ面白キ感シテ起スコト少ナクタトヘ漸ク世人モ中

ハ高尚ニナリタルモノモアレハトテ未タ全ク孔子釋等ノ

寄合ニアラサレハ其樂ミトスルトコロモ亦自ラ其度ニ連

レサラハ面白味薄カルヘシサレバ今日ノ人情ヲ以テ見レ

ハ愛戀ノ情ニ關シタルコトナドハ人間ノ所作中千狀萬態

中々趣考ノ面白キモノアリテ多少引合ニ出ツルモノナレ

バ其種類ニヨリテハ一概ニ猥褻トシ退ケサルモ可ナラン

然シナカラ親子カ赤面セサル丈ニハ是非トモ注意シ又之

カ爲メ聞ク人ヲシテ有害ノ感覺ヲ起サシメサル位ニナシ

テ下等ナル猥褻ノ言葉ヲ用井ルカ如キハ最モ謹シムヘシ

且ツ情死、逃落、間夫、圍者、藝妓、娼妓等ノ色氣話其他茲

ニ例ニモ出シ兼ヌル金看板附ノ猥褻調ハ一切禁物ト致ス

ヘシ而テ今日ノ落語中ニ此類ノモノ頗ル多キ所以ハ前

述ヘタルカ如ク聞人カ多ク此方ヲ好ムカ故ナレト又一二

ハ猥褻ハ人ヲシテ笑ハシムルコト一審容易ナレハナリ然レ

此話ノ作り様ニ由リテハ猥褻ニアラストモ抱腹解頤ノコ
 ト少ナカラス例ヘハ能ノ相狂言ヤイソツプ物語ナドニハ
 中々面白ク味アルモノアリ又今日ノ落語中ニモ此類ノモ
 ノナシトセズサリナカラ是ハ猥褻調ヨリハ話ス方ニテ難
 キヲ覺ユル故ニ往々易キ方ヲナスモノニテ畢竟一ニハ落
 語家ノ拙ナルニ據ルト云フヘシ兎ニ角落語家ノ話、洒落
 ナドハ往々世間ニ流行スル言トナレハ世人ヲシテ猥褻ノ
 外ニモ種々面白キコトアルヲ知ラシメ漸々猥褻ノコトハ云
 ハシメサル様ニ心掛クヘシ
 次ニ今日ノ落語ハ餘リニ見識ナク往々野鄙ニメ紳士貴女
 ハ勿論已レカ如キモノデモ座ニ安スルヲ厭フモノアリ見
 識ノアル落語ナド、云フハ餘リ學者然タル様ナレヒタト
 ヘハ小説ニセヨ演劇ニセヨ不見識無茶苦茶ナルハ少シク
 事物ヲ解スルモノニハ面白シトハ思ハレズタマツマラヌ事
 ナ話シクダラヌ寐言ヲ可笑ナ面ツキデ話ス類ハ中ニハ面
 白シト思フ者モアランガ餘リ馬鹿ゲタルコトニテ滑稽ノ
 部ニモ入レ難キ程ナリ且ツ落語ハモト人ヲノ樂マシムル
 ナ專一トナスモノナレヒ前ニモ述ヘタル通り世間往々之

カ爲メ感覺ヲ起スモノニテマシテヤ下等社會ヤ少年輩ニ
 至リテハナホサラノコトナレハ盜賊ノ手柄話ヤ逃落、噲
 逃ノ頓智妙計ナドハ止メテ自ラ幾分カ世教ニ得ルトコロ
 アル位ニハ注意シタキモノナリ故ニナルベク滑稽ノ中ニ
 モ幾分ノ見識ヲ備ヘ一寸味アル様ニ致シ人物ノ談話ニモ
 充分ノ面白味ヲ附ケタトヘハ其ノ語ニテ當人ノ性質ヲ知
 ラシメ又世間ノ事ナドニ當リテ面白シキ意味アル様ニナ
 スヘシ此ノ如キコトハ今日ノ落語家中ニハトテモ出來サ
 ルモノモアランカ此輩ハ自ラ作ラズトモ受賣ヲナシテモ
 ヨロシ唯從來ノ惡シキチ廢スルノミニテ可ナリ又言語モ
 今日ノトコロニテハ往々野鄙失禮ノコトナキニアラズベ
 ラン、メ、イ、社會ノ假聲ヲ使フニハ其通り野鄙デモ失禮デモ
 少シハ反テ有ノ儘ガヨケレヒ落語家ガ話ノ筋ヲ云フ時ニ
 ハ餘リ野鄙ニナラサル様注意スヘシ又洒落ナドモ遊廓ヤ
 博徒社會デ使フ言葉ナドニヒキカケルベカラス然ルヒハ
 タ、野鄙ノミナラス往々中等以上ノ人ニハ解シガタキコ
 トアリ洒落ノ不通ホド間拔ノモノハナシ
 落語ノ中「落シ話」ハ滑稽ヲ專一トスルモノナレハ文章ヤ

節ヲ貴ブ淨瑠璃ナドハ違ヒ成ルヘク耳新ラシキヲ良ト
 ス常ニ同シ洒落ヲ云ヒ同シ落ヲ云フキハ話ガ死シテ滑稽
 ノ味薄クナルモノナリ當座即席臨機應變ノ洒落ヲ用井耳
 新ラシキ落ヲ付ケ思ハヌ所ニテボカリト落サバ聞人モ手
 チ打チテ興ニ入ルベシ初メヨリ今落サレルゾト分テ居リ
 テハ面白カラス就中洒落ナドハ版テ押シタル如クニテハ
 少シモ可笑味ナシ故ニ荀モ落語ニ從事スルモノハ絶エス
 新案妙考ヲ練リタトヘ古キ話ニテモ頓智頓才ヲ以テ滑稽
 ヲ添ヘ活シテ話スヘシ且又「落シ話」ニシテタゞ滑稽ノミ
 ニテ落ノナキモノアリ是ハ己ノ考ニテハ強テ善キコトナ
 リト賛成スルニハアラ子ドサリトテ惡トハ思ハレス成ル
 ヘクハ落ノアルチヨシトスレモ之ナクトモ全体ノ仕組ニ
 シテ味アルモノナラハ極リタル落ナクモ尤ムヘキ程ノコ
 トコハアラス

「落シ話」ノ中へ躍リヤ歌ヲ入レ甚シキハ寧口躍リヤ歌へ
 「落シ話」ヲ入レル位ノ割合テナスモノアレモ是ハ感服
 セス但シ一派「話入り躍」「話入り歌」トデモシテ茲コ所謂
 落語ノ部内ニ入ラザラハヨケレモ純然タル落語ハ落語ヲ

聞クモノニテ躍リヲ見歌ヲ聞クモノニアラス類ハ畢
 竟話ノ拙ナルチゴマカスモノ、如シ宜ク廢スベシ而テ
 「落シ話」モ自作ヤ在來ノ話バカリテナク講釋師カ八犬傳
 水滸傳ヲ讀ム如ク膝栗毛ノ如キ類コシテ味アル滑稽譚ヲ
 面白ク演スルコトモ隨分宜シカルヘシ是ハ淨瑠璃語カ
 「チヤリ」ヲ語ルト同様ナルコトナレハナシガタキニハア
 ラザルベク上手カ演シナハ面白キコトナラン唯今日適當
 ノ書少ナキチ憾ムノミ

落語ノ中「人情話」ハ人情ヲ寫スチ專トスルモノナレモ人
 情トハ廣キコトニテ荀モ話コデモナルモノハ可笑シキヲ
 悲シキコト盡ク人情ナラサルハナシ故ニ茲ニ「人情話」ト
 謂フハ滑稽ニアラサル話ヲ總稱シタルモノト知ルヘシサ
 レハ是ハ「落シ話」ホド頓智頓才當座即席ノ妙趣アラサル
 モ可ナリ而テ今日ノ「人情話」ハ大抵色情俠客等皆區々々
 ル小事コテ堂々タル大事件ヲ話スコトナシ是已レカ常ニ
 遺憾トスル所ナリ尤モ別コ講釋ト云フモノアリテ稍堂々
 タル事件ヲ演スレモ講釋ハチト感服セヌトコロアリ落語
 ニテナサバ面白サ一層ト思ハルヘナリ又今日ノ「人情話」

ハ大抵事件ノ些々タル故カ語氣ニ勢ナク七十八十二ナル
 老婆カ糊ヲ練ル様ニ同調子テベタリトヤラル、ニハ
 閉口ナリ凡ヘテ何ニ限ラス同調子ノミニテハ面白カラス
 悲シキ所ハ沈ミ勢アルトコロハ揚リ種々變リタル語勢ア
 ルヲ以テ巧トスサリナカラ餘リ怖畏ラシキトコロヤ慘酷
 ナルトコロ極々卑陋ナルトコロナドハ話ノ表ニハ省ヅク
 方ガヨシ此故コ今ハ止ミタル様ナレト所謂怪談ヤ漫リ
 ニ人ヲ斬リタリ攻メ殺シタリスル類ハ成ルヘク謹シムヘ
 シ

「人情話」ト云フ位ナレハ第一二人ノ心ト云フトコロニ注
 意シタミ山ノ中テ一人連レヲ見失テ畏怖キ思ヒヲナス
 ノ、五人ノ賊ヲ敵手ニ戰テ人ヲ助ケタノト云フ様ナコ
 ト斗リテナク兎ヤセン角ヤセント良心ニ問ヒ心ニ苦シム
 トコロナトチ巧ニ寫ス様ニナスヘシ又「人情話」モ「落シ
 話」ト同様人ノ樂シミトスルヲ專一トスル方ナレハ強テ
 勸善懲惡ヲ旨トセサルモタトヘ實事ニモセヨ首尾大ニヨ
 ロシカラズノ寧ロ勸善懲善トテモ云フ類ハ話サヌガヨシ
 且一般本邦人ノ僻ニヤ「人情話」中悲シキトコロニテ一寸

洒落ヲ入レルコトアレト是ハ實ニヨロシカラザルコトナ
 リ此ノ如クスルキハチト馬鹿ニスル様ニテ眞ノ聞人ニハ
 面白カラズ思ハル、ナリ悲シキトコロハドコマデモ悲ミ
 チ込メテ其情ヲ寫スカヨシ然シナカラ素ヨリ「人情話」ハ
 凡テ愁歎テ持切レト云フニハアラス又「人情話」モ「落シ
 話」ト同様面白キ小説物ヲ話シタランニハ嘸カシ愉快ナ
 ルヘシ

「人情話」ヲ一回ニテ勸善懲惡ノ結末ヲ付スル様ニスヘシ
 トノ說アレト是ハチト賛成シカタシ多クノ話ノ中コハ一
 二回ニテ結局ニモ至ルアリ又三四回ニテモ結局ニ至ラサ
 ルモアリテ其結局ニ至ルマテノ間ニ千万無量云フヘカラ
 サルノ面白味アルモノナリサレハ一二回ニテ結局ニ至ル
 話アルモヨケレト一概ニ「人情話」チ一回テ結局ニ至ラシ
 ムルベシトスルキハ皆一口話トナリテ趣キ薄クナルヘシ
 尤モ一回ト云テモ十時間十二時間續ケテ話シテモ一回ナ
 レト物ハ餘リ長キハ倦ムモノ故大抵一時間前後トスヘシ
 凡テ話モ其主トスヘキ人物ノ生レ又前ノ前カラ死シタル
 後ノ後マテチ述ヘ立テ餘リニ長キモ閉口ナリ

以上述ヘタルハ已カ落語ニ付テ改良シマホシク思フ廉ヤ
 ヲ畧舉タルモノニモ此外論シタキ點モアリ又洒落ノ調子
 人情ヲ寫ス工合等所謂技藝上ニ係ル改良案モナキニシ
 モアラザレハ玆ニハ省フキタリ兔ニ角落語ハ我國一種ノ
 巧ナル藝ニシテ小説演劇ト共ニ各別ノ效能面白味アルモ
 ノナルニ小説演劇ハ近頃改良ヲナス最中ニシテ世論少ナカ
 ラサレハ落語モ亦宜シク改良シ其氣韵ヲ高ノ紳士貴女ノ
 前ニテモ恥シカラヌ丈ケノ度ニ昇ラセ愈一種高尚ナル藝
 トナシタトヘ學校ノ講義程ニアラズトモ幾分カ世教ニ得
 ル所アル様ニナシタシ良シ一步ヲ讓リテ之ナクハ之カ爲
 メヨカラヌ感覺ヲ起サシムルカ如キ弊ハ斷然除クヘキナ
 リ尙ホ席亭ノ構造、組織等ノ改良ニ至リテハ他日又論ス
 ルトコロアルヘシ

○ 花ノ功用ヲ論ス (前号ノ續キ)

於英國龍動 伊藤 篤太郎講演

余ガ前キニ講演セルトコロニ據リテ考フレバ百花群芳ノ
 麗色芳香ヲ放チテ蟲類ヲ誘引シ依テ以テソノ媒助交通ニ

到ルハ畢竟ソノ蜜ヲ有スルニ根スルモノナリト斷言スル
 ヲ得ベキニ似タリ又蟲類ノ百花ニ來ルノ目的ハソノ餌食
 即チ甘美ナル蜜等ヲ得ンガ爲メナリ故ニ今此蜜トハ抑モ
 如何ナルモノナリヤヲ論ズルハ余ガ最モ緊要ナリト信ズ
 ルトコロナリ抑モ蜜ハ蜜腺ト稱スル一種ノ細胞組織ヨリ
 分泌スルトコロノ溶液ニシテ此腺細胞ハ脈管束ノ尾端ニ
 集合シテ之ト蜜接ノ關係ヲ有スルモノナリ又蜜ハ此蜜腺
 ヨリ泌出スル後蜜槽中ニ滯溜ス從來先輩ハ蜜ノ花ニ存在
 スルハ前ノ如ク花ノ交通ニ要用ナル關係アルモノナルヲ
 知ラズ或ハバトリツク、ブレイヤ氏ノ如ク蜜ハ花粉ヲ溶
 解シテ以テ之チ子房ニ送ルノ液ナリトシ或ハポンテデラ
 氏ノ如ク只子房ヲ滋潤ニシテソノ乾燥ヲ禦グカ爲メナリ
 ト云ヒ其他諸説紛々タリシガ初メテスブレンゲル氏が蜜
 ハ群芳ヲ誘引シ以テ間接ニ媒助交通ヲ得ルノ要品ナリト
 ノ新説ヲ唱出セシ以來諸説靡然皆之ニ歸着セリ故ニ蟲類
 媒助ヲ得テ交通スルノ植物ハ之ヲ有シ然ラザル者ハ之ヲ
 有セズ例之バ薔薇科ニ屬スル植物ハ多ク蟲類ノ媒助ヲ得
 テ交通スルモノハ故ラニ多ク蜜ヲ有スレハ同科中地榆

ワレモカウ

ノ屬ニハ風ニテ交通スル種アリ即チ蜜ヲ有セズ又槭樹^{モミジ}ノ屬ハ殆ンド皆蟲類交通ヲナスモノニシテ即チ蜜ヲ有ス然ルニ獨リ同屬中風ニテ媒助交通ヲ得ルノ一種ハ蜜ヲ有セザル等其他諸例最モ寡シトセズ斯ノ如ク明瞭ナル諸例アルニ關セズブレイヤ、ポンテデラ等先輩が蜜ノ要用ナル真理得ザリシハ大ニ怪ムベキニ似タリト雖モ蓋シ其所以亦ナキニ非ズ乃チ蜜ノ位セルハ、只花部ノミニ非ズ或ハ葉面ニ在ルアリ或ハ莖上ニアルノ例尠カラザルニ因リシナラン乎

ベルトト呼ベル本草家ハ此花外ニ存在セル蜜ノ効用ニ就キテ云ヘルヲアリ曰ク氏が曾テ南亞米利加ヲ涉獵セシ際「アケシア」樹ノ一種ヲ創見セリ此樹若シソノ護衛ナキハ一種ノ葉截蟻來リテ綠葉ヲ截斷シ管ニ之ヲ啖食スルノミナラズ亦葉面ニ菌ヲ耕作ス故ニ此惡蟻ヲ防禦センガ爲メ枝上ニ數個ノ刺角ヲ生ジ又小葉ノ根際ニ小囊アリテ内ニ蜜ヲ蓄ヘ葉端ニ梨顆ノ形ニ似テ甘美ナル小粒ヲ生ズ偕刺角ハ中央空虚ニシテ一種ノ微蟻數萬コノ窠内ニ住居シ彼ノ美果ヲ食ヒ蜜ヲ飲ミテ「アケシア」樹ヲ護衛ス若シ彼

ノ惡蟻來ルキハ微蟻ソノ窠内ヨリ奔出シテ之ヲ逐斥スルノミナラズ亦啖植獸ノ災害ヲモ免ル、ヲアリ又「クレロデンドロン、フラグラナス」ト云ヘル植物ニモ蟻ノ護衛スルヲアリ曾テデルフ^井氏モ此花ヲ折ラントセシニ突然枝上ヨリ微蟻雨ノ如ク全身ニ降り掛レリト云ヘリ其他「ミルメコヂア、アルマタ」及ビ「ヒヅノファイタム、フアルミケラム」ハ空中ノ水氣ヲ吸收シテ生活スル一種ノ奇草ナルガ最モ蟻ト密接ノ關係ヲ有ス此草初メテ其莖ヲ抽ズルヤ蟻來リテ直ニソノ莖根ヲ咀嚼シ莖ハ傷チ受ケテ少シク勃長ス勃スレバ蟻再ビ之ヲ嚼ミ愈々ソノ肥大チ加フ後數次ニシテ遂ニ頭大ノ塊ニ變ズ蟻乃チ此大塊ヲ窠トシ内ニ無數ノ隧道ヲ穿チテ蟻ノ大都會ヲナスナリ然レモ博物家フラルブス氏ガ輓近著述ノ「東洋群嶼紀行」中記載スル所ニ據レバ此植物ハ種子發萌スルノ後蟻ノ來ラザルコ先チ既ニ小隧道ヲ有セリト謂ヘリ余按ニ伊人ベツカリ氏モ曾テ「ピアンテ、オスピタトリシ」(即チ伊語ニテ動物ノ住居スル植物ト云フ意)ト稱シ此説ヲ主唱セシヲアリ又タ棲蟻植物ノ件ニ就キ獨國レゲンスブルヒ府發行ノ「フ

ロラト云ヘル植物學雜誌中學士カリステン氏ハ近來「蟻

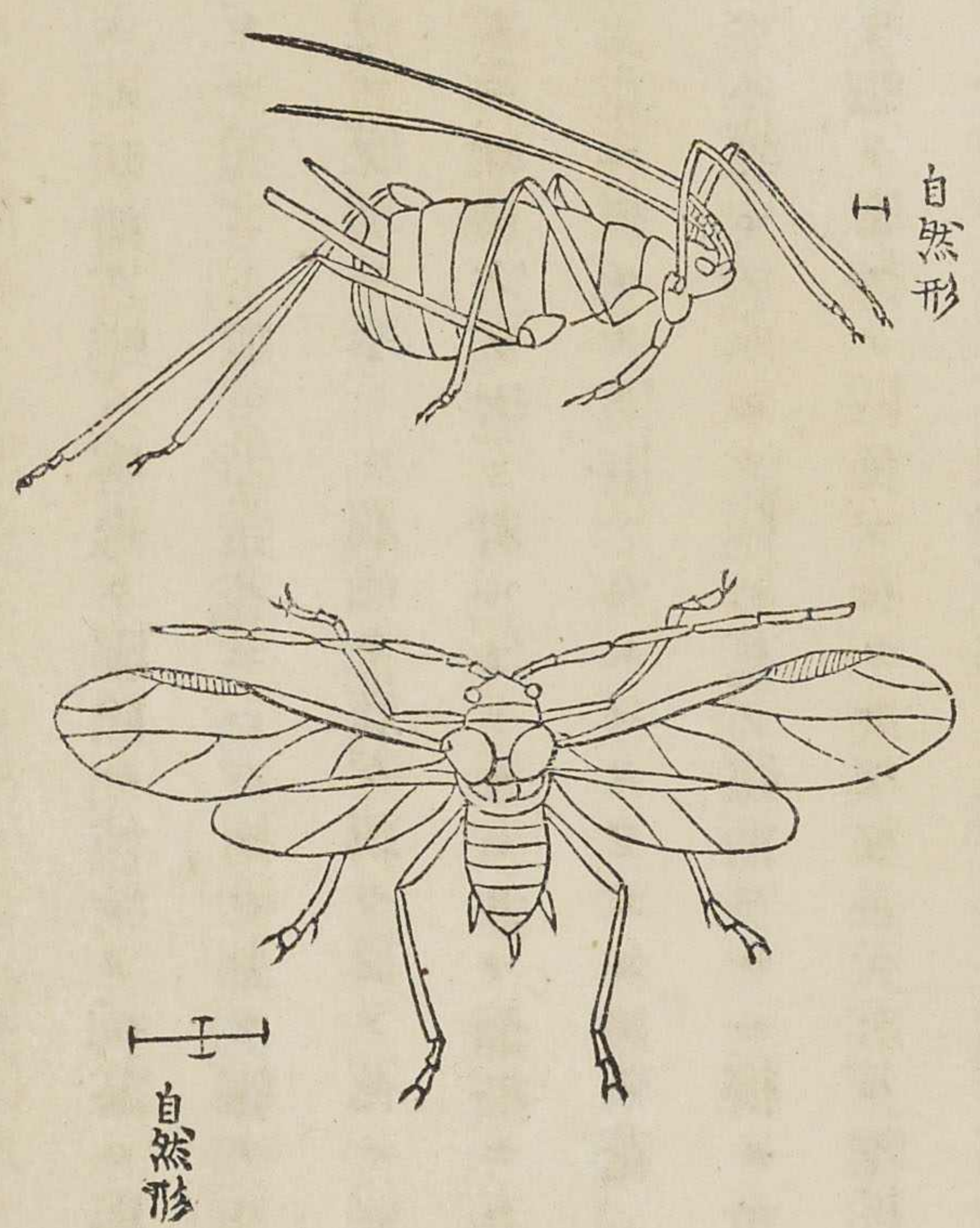
リ之ヲ以テ幼蟻ヲ哺育ス若シ「イク子ウモン」等ノ如キ

ロラト云ヘル植物學雜誌中學士カルステン氏ハ近來「蟻草說」ト題セル一篇ヲ記載シ「セクロピア、ペルタタ」ト稱スル植物モ亦蟻ニ密接ノ關係アリト論ゼリ斯ノ如キ奇例ハ日本ニ於テハ餘リ見聞セザルトコロナレハ蟻ガ花ノ蜜ヲ盜ミ去ル小蟲ヲ追捕シテ防禦ヲナスコトハ余輩ノ常ニ目撃スルトコロナリ瑞西ノ有名ナル蟻學士フチレル氏ハ或ル蟻ノ巢ヲ熟現セシニ螟蛉、匾蛋其他種々ノ植物ニ有害ナル微蟲ノ屍、浮虜等ヲ巢内ニ運ビ來ルヲ夥ク一分間ニ廿八疋ノ割合即チ一時間ニ千六百餘疋ヲ持來レリト云ヘリ以テ蟻ノ植物ニ有害ナル小蟲ヲ捕殺スルヲ夥多ナルヲ側知スヘシ因ニ云フフチレル氏ハ近來日本ノ蟻類ヲ研究スル頗ル熱心ニテ余ニモ頃日書翰ヲ贈リ來レルガ是ハ至極面白キコトニテ學術上發見等定メテ尠カラザルベシト信ズルナリ

又茲ニ最モ可驚害蟲アリ「アリマキ」一名「アブラムシ」ト謂フコノ小蟲尻部ニ細管ヲ有シ此管内ヨリ蜜ヲ分泌シ之ニ因リテ蟻ニ採リ食ハル、ヲ免ル、ノミナラズ却テ蟻ノ家蓄トナルナリ蟻ハ此小蟲ヲ大切ニ養フテソノ蜜ヲ搾

リ之ヲ以テ幼蟻ヲ哺育ス若シ「イク子ウモン」等ノ如キ小蜂此「アリマキ」ノ体内ニ其卵ヲ産附ケント欲シテ來ルコトアレバ蟻大ニ忿ツテ之ヲ逐斥シ「アリマキ」ノ周圍ヲ巡廻シテ能ク之ヲ觀護ス此蟲ヲ呼ンデ「アリマキ」ト云フモ其所以亦ナキニ非ルナリ又マツクク氏ガ米國昆蟲學會報告書中(第七冊二百八十七頁千八百七十七年發刊)記載スルトコロニヨレバ「アテメレス、カワ」ト稱スル甲蟲ハ蟻巢内ニ住居シ其体ノ尾端ニ數莖ノ突起アリテ此端ヨリ甘露ヲ分泌スルヲ恰モ「アリトキ」ニ異ナラズト云ヘ

第三十圖



自然形

リ

近來佛國ニテ此「アリマキ」ノミヲ專門トナセル昆蟲學士

リシユテンスティン氏ノ發見ニ據レバ學名「フォルミカ、フ

リジノサ」ト稱スル一種ノ蟻ハ宮ニツノ巢中ニ「アリマ

キ」ヲ蓄養スルノミナラズ亦之ヲ撰種シテ其蕃殖ヲ計ル

ノ方法ヲ知レリト云フ抑モ此「アリマキ」ハ生物學士所謂

交アルダー子シヨシ、オフ、ゼチレーシヨシ代子シヨシ、オフ、ゼチレーシヨシ互生ノ動物ナリ之レハ甲ナル羽翼アリテ交

尾ヲナスノ蟲ト乙ナル無翼ニシテ交尾ヲナサザル蟲トノ

二様アリ甲ハ外氣ニ生棲シ乙ハ植物ノ根際ニ住居ス即

チ甲蟲ハ秋季ニ生ツノ雌ハ通常無翼ナレト雄ハ羽翼

ヲ有シ互ニ交尾シテ卵ヲ産ス此卵春ニ至リテ孵化シ乙

蟲ヲ生ズ又乙ハ雄ト交尾ヲナサズシテ孕シ能ク胎生スツ

ノ仔蟲モ亦成長スルノ後胎生シ秋ニ至リ始メテ甲ナル卵

生蟲ヲ産ズ如斯卵生蟲ト胎生蟲ト歷代交互ヲナシテソノ

苗裔ヲ子孫ニ傳フ之レヲ交代生トハ謂フナリ倍蟻若シ孕

胎セル翼蟲ニ會スルコトアレバ忽チソノ羽翼ヲ捉ヘテコレ

ヲ擒ニシ草根ノ方ニ誘導シ後之ヨリ有翼蟲ヲ産スレバ今

回ハ之ヲ誘ヒテ外氣ニ飛ビ去ラシメ益々蕃殖ヲ計ルト云

フ

前ニ述ベタルガ如ク蟻ハ害蟲ヲ驅除シ植物ニ裨益ヲ與フ

ルコト亦無キニ非ズト雖モ通常花ニハ益ナク却テ害アルコ

多シ或ハ花ノ媒助ニ來レル羽蟲ヲ妨ゲ或ハ自ラ花ノ媒助

ヲナサズシテ却テ蜜ヲ盜ミ去ルコトナキニ非ズ如斯キコト

ラバ亦蟻ノ花ニ來ルノ防禦ナカルベカラズ勿論菊花、十

字花、繖形花等ニ於ケル蟻能ク花ノ媒助ヲナシ得ルモ他

ノ羽蟲ノ媒助ヲナスコトハ及ブベカラズ又長大ナル雌蕊ヲ

有スル花ニ於テハ蟻來リテ蜜ヲ採リ去ルモ決シテ花ヲ媒

助スルコトナク加之却テ媒助ノ爲メ此花ニ來レル蝶蜂等ノ

如キ羽蟲ヲ逐斥スルコトナキ能ハズ試ニ針又ハ楊枝ニテ蟻

ノ体ニ觸ル、ハ蟻忽チ忿ツテ之ニ嚙附クナリ故ニ蜂蝶

等其長嘴ヲ花中ニ挿入スルノ際若シ蟻ノ体ニツノ嘴ヲ觸

ル、コトアレバ蟻ハ前ノ如ク之ニ嚙附コトアルベシ如斯キコ

トアラバ蟻ハ自ラ花ノ媒助ヲナサザルノミナラズ却テ之ヲ

障グルコトアリ然ラバ植物ハ何チ以テ此等ノ妨害ヲ豫妨ス

ルヤ

諸君試ミコ草木ニ採リテ之ヲ檢スレバ或ハツノ莖毛上ニ

論セリ余ハ曾ホ雀ノテ蟲類ヲ誘導スルノ要具ナル花ノ麗

茸ヲ生シ或ハ薊アザミノ如ク針ヲ備ヘ或ハ「ヤグルマギク」ノ如ク其全体平滑ニシテ只ツノ萼ニ鋸齒ヲ有スルモノアリ又「ミヅタマサウ」ノ如ク其花萼ニ微毛ヲ生シ各ツノ毛端ヨリ粘液ヲ分泌シテ蟻等ノ來リテ花中ニ入ルヲ防禦ス又蓼ノ一種水陸共ニ生ズルモノアリ陸ニ生ズル株ハ莖上毛茸ヲ生シ毛端ヨリ粘液ヲ分泌シテ蟻等ノ昇リテ花ニ近クナカラシム然ルニ水中ニ生シテ其莖本ヲ水中ニ濡スノ株ハ此憂ナキガ故ニ其莖平滑ナリ又ツノ花ハ雄蕊長ク花瓣外ニ突出シタルガ故ニ羽蟲ハ之ニ觸レテ花ヲ媒助シ得ルト雖ハ蟻等ノ如キ無翼ノ蟲類ニアリテハ只蜜ヲ盜ミ去ルノミニテ決シテ花ノ媒助ヲナスコナキヲ以テ此防禦アルナリ此屬ノ草ニ一種「マヽコノシリヌグヒ」ト稱スルモノアリ莖上ニ銳刺ヲ生シ恰モ鋸齒ノ如シ此外、蜜ヲ保護セシムガ爲メ雨天ニ閉花スル植物寡カラズ是レ蜜ノ雨ニテ流出スルヲ防禦センガ爲メナリ

余ハ嚮キニ花ノ麗色芳香ニ物ヲ放チテ蜜ノ花中ニ存在スルヲ知ラシメ依テ以テ蟲類ヲ誘引シツノ媒介ヲ得テ自己ノ交通ヲ全フスルモノナル所以ヲ指示シ次テ蜜ニ就キ詳

論セリ余ハ猶ホ進ンデ蟲類ヲ誘導スルノ要具ナル花ノ麗色、芳香ノ二物ヲ研究スル最モ緊要ナルヲ信ズルナリ抑モ群芳ノ艷麗ナル彩光ハ別ニ他ノ所以存スルニ非ズソルビー氏ノ說ニ據レバ百花ノ色質多クハ葉ノ色質ト同物ニシテ唯ツノ葉綠質變化ヲナシテ消滅セルモノナリ故ニ花瓣ノ色或ハ秋季葉ノ紅爛ナルニ類シ或ハ春時萌芽ノ紅黃ヲ呈スルニ似タリト云ヘリ今之ヲ組織學上ヨリ檢スレバ全ク花瓣ノ細胞組織中（甲）成形質ノ球粒ヲ含有シ或ハ（乙）此球粒細胞液ノ爲メニ溶解セルモノ在ルニ據ルナリ語ヲ換ヘテ之ヲ謂ヘバ花ノ美色ハツノ彩光ヲ異ニスト雖モ悉皆此球粒ノ作用ニ外ナラズ且通常甲ハ黃、柑、褐ノ諸色ヲ放發スルノ色質ニシテ乙ハ葉綠質ヨリ變成セルモノトス此球粒ハツノ始メ綠色ナレモ花ノ開クニ隨テ漸々其色ヲ變シ遂ニ各種ノ彩光ニ變化ストノ說アリ又乙中白色ノ質ヲ「アンソウウシン」ト稱シ青色ノモノヲ「アンソシアニン」ト云フ其他紫色、紅紫色ノ如キハ多分細胞液中ニ酸素ヲ混合シテ「アンソシアニン」ニ作用ヲナスモノニ外ナラザルベシト云ヘリ通常花色ハ白黃ノ二色最モ多シト

ス左ノ表ハ二十七科ニ屬スル二千二百種ノ植物中各花色ノ多寡ヲ示スモノヨシテコーラア、シューベラア兩氏ノ編成ニ係ル

花色	四千二百種中ノ分數	千ノ比例
白	一二九三	二八四
黃	九五二	二二六
赤	九二三	二二〇
青	五九四	一四一
紫	三〇七	七三
綠	一五三	三六
柑	五〇	一二
褐	一八	四
黑	八	二

右ノ表ニテ觀レバ白、黃、赤ノ三色最モ多ク黑褐ノ兩色最モ尠シトス又花ノ芬香ハ一種ノ揮發油ヲ含蓄スルニ因ルモノナリト雖モ然ラザルモノ亦尠シトセズ概シテ白花ハ最モ芳香深シトス左表ハ右數中花色ニヨリテソノ芳香アルモノ、多寡ヲ現ハスモノナリ

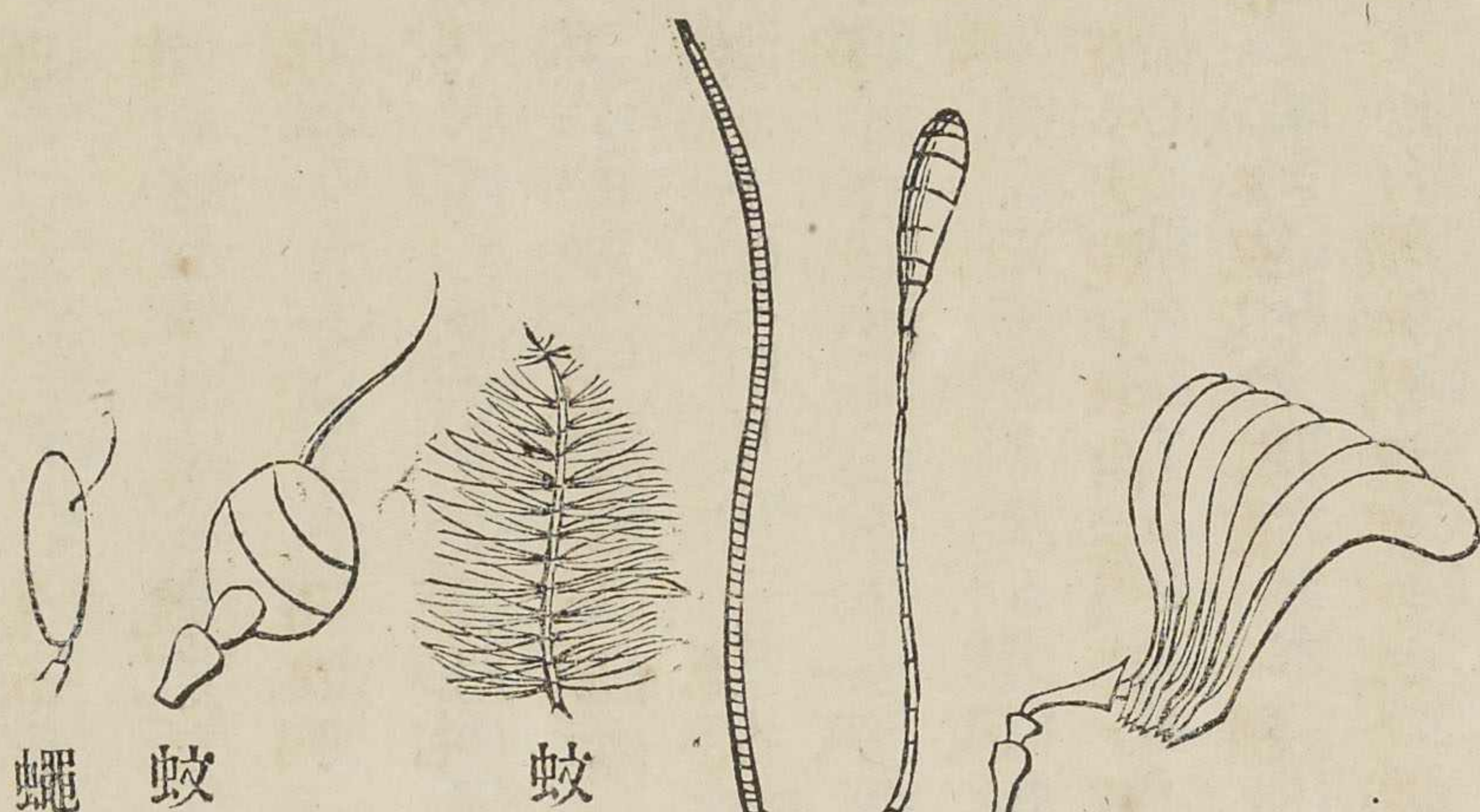
花色	數種	芬香アル者	芬香芳清ノ者	芬香臭惡ノ者
白	一一九三	一八七	一七五	一二
黃	九五一	七五	六一	一四
赤	九二三	八五	七六	九
青	五九四	三一	二三	七
紫	三〇七	二三	一七	六
綠	一五三	一二	一〇	二
柑	五〇	三	一	二
褐	一八	一	〇	一

芬香ハ彩光ニ續キ蟲類ヲ誘導スルノ要具ナリ夜間開花スル植物ハソノ芬香最モ芬清ニシテ花瓣ハ夜間ニ最モ注目シ易キ色例令バ黃白ノ兩色ヲ呈スルヲ常トス忍冬、月見草ニ於ケルガ如シ蟲類ハソノ嗅力最モ銳利ニシテ此嗅機ハ頭上ニ位シ其形狀第十四圖ノ如ク或ハ鬚ニ似タルアリ或角ニ類スルアリ或ハ球ノ如ク或ハ鋸ニ均シ又十五圖ノ如ク稀ニハソノ鼻ヲ尾端ニ有スル蟲アリ第十六圖ハソノ頭巨大ナル嗅機ヲ有スル蟲ナリ

余ハ猶ホ花ノ艶美ナル彩光ハ蟲類ヲ誘導スルノ要具ナル

ガロキ状ナリノ以テ自家交通ニ更ニ又柳葉菜一種ハ其

第十四圖

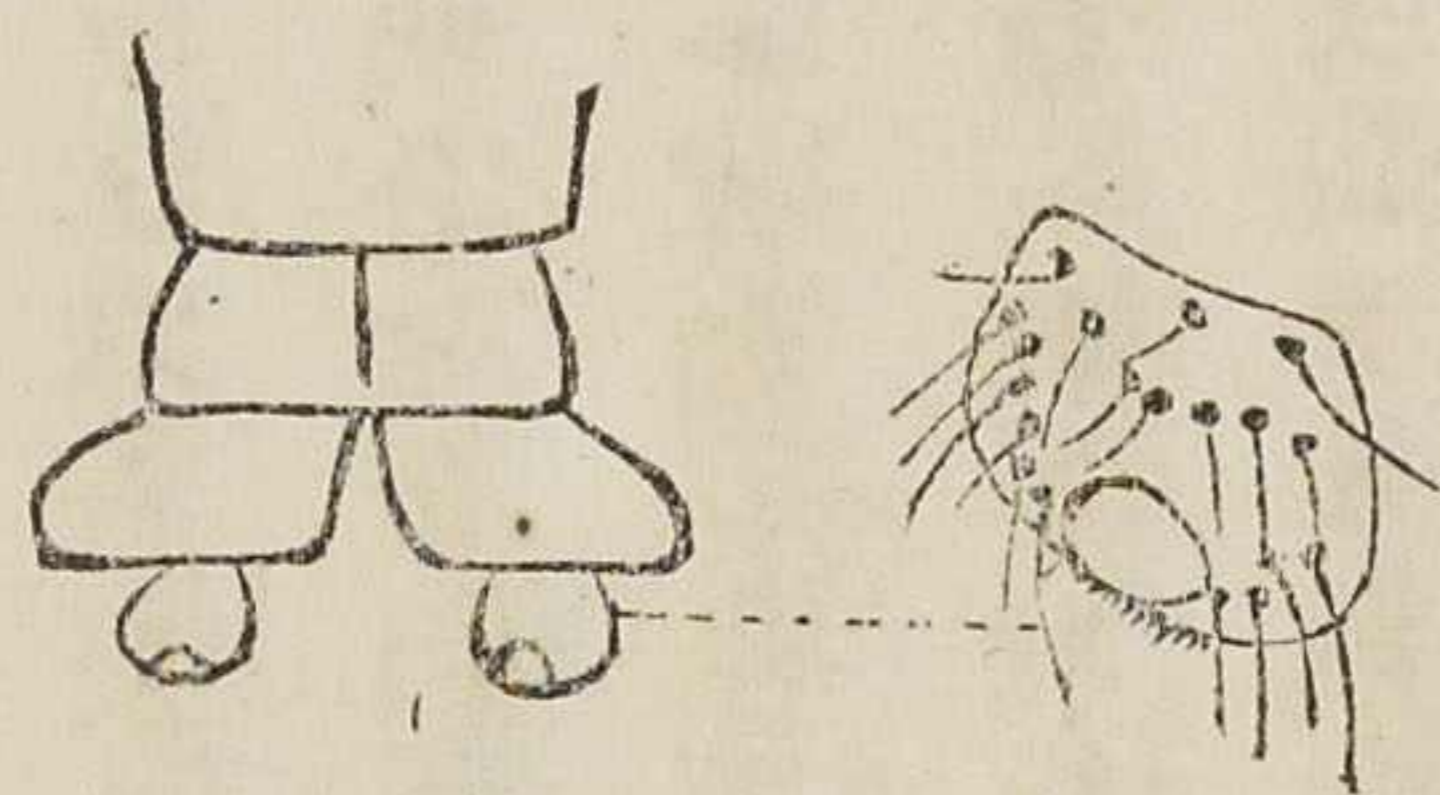


蠅 蚊 蚊 蠶 蝶 金龜子

ヲ證センガ爲メ左
ニ一二ノ例ヲ引用
スベシヘルマン、
ミユルラア氏ノ說
ニ據レバ錦葵^{ゼニアレヒ}及ビ
圓葉ノ冬葵^{カンアラヒ}ハ共ニ
雜生ス甲ハ第十七
圖ノ如ク雌雄兩蕊
ツノ位置ヲ異ニシ
相互ニ交通スルヲ
能ハズ(講演第八
項ヲ參照セヨ)故
ニ蟲類ノ來リテ媒
助ヲ要スルナリ今

ツノ辨ヲ檢スルニ潤大ニシテ色澤美麗ナリ然ルニ乙ハ自
家交通ヲ得ルモノニシテ余ガ曾テ謂ヒシ殆ンド稀ニアル
モノ、一ナリ(同上ヲ見ヨ)故ニ蟲類來ルヲ最モ罕ナリ今
ツノ雌雄兩蕊ヲ圖スルニ第十八圖ノ如ク相互ニ網絡セル

第十五圖



ガ如キ狀ヲナシ以テ自家交通ニ便ニス又柳葉菜^{ヤナギサウ}一種ハ其
花穂ヲナシ肥大紫色ニシテツノ美、賞スルニ絶ヘタリ蟲
類ノ來ルヲ亦最モ勤カラズ然
ルニ他ノ一種ノ柳葉菜^{アカサナ}ハ花矮
小ニシテ美ナラズ蟲類來ルヲ
甚タ稀ナリトス今ツノ所以ヲ
尋ヌルニ甲種ハツノ雄蕊、雌
蕊ノ成熟スルニ先チ既ニ花粉
ヲ吐出シ去ルガ故ニ自己ノ交
通ヲナスヲ能ハズ然ルニ乙種雌雄兩蕊同時ニ成熟期ニ達
シ以テ自己ノ交通ヲ得ルモノトス今ヤ余ハ甲種ノ如ク雌
蕊ノ成熟期ニ先チ雄蕊成熟期ニ達スルノ花ハ蜂ノ媒助
ヲ得テ交通スルモノナルベキヲ知ルナリ請フツノ所以ヲ
左ニ辨ゼン
(未完)

雜報

○大學通俗講談會 兼て舊東京大學理醫學兩部の教授諸
氏の設立されたる理醫學講談會は先年東京大學の一ツ橋

より本郷へ移りたると又其後の改革とよ因て一時休會となり居たりしが今度更よ之を大學通俗講談會と改稱し理醫學二科の外に尙法、文、工の三學科を加へ講談者は五大學の教授諸氏と第一高等中學校の教諭數氏とよして相替らず眞の學理を通俗的よ講談さる、由又理醫學講談會よは會長と云へるものなかりしが今度大學通俗講談會會員諸氏より帝國大學總長渡邊洪基君に其の會長たらんとを乞ひて同氏の承諾を得たる由又幹事菊池大麓、村岡範爲、兩君の周旋よ依て當年前期の講談者は穗積陳重、小金井良精(三月廿六日)渡邊渡高橋順太郎(四月十日)富井政章、小藤文次郎(四月廿三日)古市公威、榊(五月一日)志田林三郎、和田垣謙三(五月廿日)末岡精一郎、寺尾壽(六月五日)の諸氏と極まりたる由何れも有名なる學者なれば以前よ倍して世を益すると記者の疑を容れざる所なり何れ演題は聞き込み次第之を本誌に登載せべし

○又 理醫學講談會の經驗よより大學通俗講談會の傍聽券は別席(拾錢)並席(五錢)定期(別席五拾錢並席二拾錢)の三種に別ち之を最寄の場所に於て賣捌く由其席料を徵

取する理由は一方よ於ては餘り多人數の傍聽人と避け又一方に於ては廣告料其他の諸雜費を償んが爲なりと定期切符よは一期即ち六回分の講談者姓名并に演題を記載して聽衆の便利を謀る積りなる由

○帝國大學々生英語會 帝國大學々生諸氏は今這標題の如きものと設立なし専ら英語を以て討論、談話の練習に従事する由又傍ら英語唱歌、音樂等をも催ふして興を添るとか云ふ斯く英語の盛んに流行するは何より目出度きとよこそ

○東京高等女學校 主幹箕作佳吉君は今度同校の教師ミスプリンス并よ帝國大學の穗積、矢田部、櫻井、菊池、外山の諸氏お乞ひて毎週一回同校の生徒の爲よ談話會を催ふさる、由よて其第一會よは箕作君自ら脩身上の談話を爲して生徒よ大なる益を與へられしとぞ

○贈答廢止會 帝國大學教授數名其他同感の諸氏は上の如き會を起したり其趣旨ハ雜錄欄内に掲載せり

○加藤弘之君の寫眞 元の東京大學の教員若干名の元の總理加藤君の大學の爲よ功有るを後世に傳ふる爲よ同氏

の寫眞を油畫よ書き之を帝國大學よ獻納するとの事なり而して畫工は同御雇佐々木三六氏よして畫へ頗る善く出來たりと

○菊池大麓氏ハ先頃ロンドン府の數學會々員よ撰擧されたり

○ニウ、ヨークの脚氣 近達の「サイエンス」雜誌に由れハ近頃サン、フランシスコより來りたる水夫の中に三人の脚氣病患者有りて其中二名は死去したる由なり

○新發明白熾ガス燈 コンラド、ダブリウ、クック氏は昨年大ブレテン理學獎勵會よ於てウ、ゴルスバツハ氏の發明よ係る白熾ガス燈よ付き演説せたり是ハ木綿よガス燈の蓋ひの形にこしらへ之よ酸化シルコニウム及び酸化ランタナム(或は酸化シルコニウム及び酸化ランタナムよ酸化イトリウムを混じたる)の溶液を浸み込ませて製したるものなり此蓋ひハ一たびガスの焰よわたれば非常なる耐熱体とありガスに空氣よ交せて得たる最高度の熱と雖耐ゆることと得と云ふ此の如きときは白熾となり甚だ穩なる光を發す遠方より見るときハ二十二蠟燭力の白熾電氣

燈かと疑はる、程なり又光に黄色を少し付けんとすれば溶液の成分を少し改むるのみにて足れりと云ふ此光明を用もればガスの量に五割より七割半の利益あるのみならずして且つ煙の生する恐なしと云ふ

○蠶魚及び其食物 シドニー、クライン氏の説ハ據れば蠶魚即ち書物や其表紙を食ふ蛤螟はテチブリオ、モリトルと云ふ甲虫にして製本の際用ふる糊の中のグリユーテンを目掛て來るものなり同氏の説よ米國より來る稍黒色の麪粉はグリユーテンを多量よ含むものなるが之を多く製本よ用ふるとなればテチブリオハ一たび其中よ入るとを得ば好む所の食物を充分よ得べし尤も之ハ藥品を施して防くよを得ると云ふ嘗てラッセル、ガビンズ氏ハ此虫は紙の色に好き嫌ひあるとよ氣付しが之は全く色付お用ひたる藥品の効能によるならん例へば黒き紙を好み薄黄色の紙を何時でも嫌ひたり又砒石を含む緑色の紙も此虫の害を遁れたり右の薄黄色の紙も多分クロム酸鉛よて色付したるものならん之に由て考れば糊を付るべき紙の色よさへ注意すれば蠶魚の害を免る、よを得べし(以上二

件ポピュラル、サイエンス、マンスリー)

○地震の爲め馬を失ふ 地震の時獸類の恐慌するは人の能く知るとなるか之か爲め往々不時の損耗と蒙るものあり昨年八月三十一日米國チャールストン大地震の際牝牛は驚愕して病氣を發しミルクの出全く止まりし者あり又或馬商は七疋の馬死せし爲め大損を受けしと去月十五の地震に相摸國よて動震最も劇かりし所にては馬驚て厩中を跳廻り爲めに足を痛め數日使役すると出來ざりし向もありしと馬を愛する人々は地震の時は右等に注意するこり緊要なる可し

○在獨國ウエルツブルグ府大學校松村任三氏より社友の許へ送りたる書翰の摘要

備當國は理學の本場丈けのとありて其教授法最宜しきと得候よは感腹仕候教員其人を得るに在るは勿論の義に候へども御承知之通り理學の教授法は機械標品掛圖摸形等を全備させ其理と講し其現象を解釋し試験を施して其証據を示すに在ると肝要よ御座候處日本にては仲々其場合に至らず殊よ植物學の如きは書籍の文通りに講釋し掛圖

は用ひず摸形スライドのなし顯微鏡準備版は見たともなし試験な

どは尙更のと申候有様は農林師範高等中學等の諸學校皆免れずと存候諸縣の中學校共に至りては論なしと可申候此等準備は教員自らが工夫すべき筈なれども其場合よも立至らず(實物を知らずよ反譯する人はあれとも)日本に理學の仲々發育さざるは是非もなきと共に御座候

當國よ於て教ゆるもの敢て高尚と申すに無之候理學逐日發育するに隨ひ往昔の空論はなくなり無益のとは逐々除去し肝要の大本のみよ進み候間往昔植物學書を著すに二十部の冊數ありしも今は一部にて完全し候様よ相成候教授法も之と同様にて二三ヶ月ばかりよして未だ植物の一斑も知らざる人が其大本を容易く知るに至り候顯微鏡準備版よて實物をありと示さる、故毫も六かしいとも思はず造化の秘を發ばきて面白きと限りもなく感し入り候とに御座候尙は教育を受くべき各人が必ず知るを要する大本のみに止り教授致候順序方法のよきとわしきとにては教育を受くべき子弟に取りてハ幸不幸幾何なるや測られず候此の學ぶとの多き世の中に無益の空論を教授さ

れては不相叶候

右の大本ニ基き植物準備版ヲ製し候ニ、今後日本理學の何分をか助けたいものでも無らんかと愚考罷在候

當學期植物講義を聴き候學生百四十名有之候へども植物専門ヨ入らんとするもの唯一人あるのみ教授は此多人數の學生ヨ顯微鏡準備版を示候

○哲學會雜誌 本誌は哲學會員の編輯にかゝるものにして本月其壹號を本郷弓町一丁目拾番地哲學書院より發兌せり該會はもと加藤弘之西周西村茂樹外山正一其他有名の哲學士の創立よかゝり其目的専ら東西兩洋の哲學を研究して其思想を我邦ヨ振起せんとするにありて今度其旨趣を世人に示し併せて其學の必要なる所以及び其洪益ある所以を世ヨ知しめん爲めに雜誌を發行するに至れり世の哲學ヨ志あるもの本誌にいつて研究する所あらは其得益蓋し計るべからざるものあらん

○末松氏演劇改良論筆記の正誤 前號の批評欄内に掲載志たる末松氏演劇改良論の筆記ヨ誤りありる由にて右筆記者ヨ左の如く申越えられたれば茲に之を掲ぐ

拜啓仕候東洋學藝雜誌第六十三号ヨ末松氏がコメジョハ滑稽洒落ヨ專ぱらと。どれでも。あれでも總てドット人を笑わすると云ふたるやうに評論しあれども右は演説の節ヨは滑稽洒落が主となり人ヨ笑はせるのが重なりと云ふ位に云はれたることよて。どれでも。これでも。悉く人をドット笑はせるものなりと云ふたるには。あらず右は筆記の簡單に爲りたるより起りたる御非難と思ひ候へば此段申入候也 右演説筆記者

明治二十年一月 市東謙吉告白

○本社へ寄贈せられたる書籍及物品

獨乙文希臘英雄列傳 東京全修學校

男女勸學新誌 勸學新誌社

哲學會雜誌 哲學會

染物見本數品 大阪授産館

雜 錄

○贈答廢止會設立旨趣

物をもて人に贈るの風習は社會學上より之を觀れば元來

野蠻人種の畏懼又は愛情より他の歡心を得んと欲するよ
起りしものと云ふへしと雖も因襲の久しき今日に至りて
は全く一種の義務に屬し吉凶禍福の吊賀をはじめ平素の
音信等互に物を贈り又は之よ答ふるともて例とし之を爲
すよあられされば交誼を全うする能はざる事とはなれり畢
竟此等の慣習は時世の變遷社會の形狀よ從ひて適宜の斟
酌を加ふべき事なるよ百事改良よ赴く今日よありて依然
として舊慣を襲ふのみならず其事柄よ依りては益々鄭重
よ趣くの傾向もなきにあらざるは怪しむべき事ならずや
顧ふふ人よ既に其陋を知り煩を厭ふも社會一般の慣習は
一人一己の力よて能く之を動かし得べきにあらす且は其
事一種の義務よ屬し切よ交際上に關するものなれば嫌疑
を顧慮する點もありてかた／＼終よ今日迄不問よ措きし
よもあるへしされど今日の社會は昔日の社會と異なり交
際の情誼よ達するの道と物品贈答の事の如き末節よ依る
へきよあらずさら／＼此風習の如きハ徒よ無益の手續と思
慮とよ勞し尙且交情と束縛し或は却て疎遠を導くの媒を
なすものと稱すへきのみ故よ我輩今此會と設け聯合の力

に依りて時世適宜の斟酌を加へんとす依て今左に掲ぐる
が如き會約を立て會員たらん者は互よ此會約に從ひ又會
員たる者の他の會員たらざる者よ對する時は力めて此會
約の精神に依りて成るべく贈答の煩節と省かんと期し希
くは漸とて社會因襲の陋俗を改良し時世適當の好風習
を起さんことと

會約

第一類 婚姻、出産、賀の祝、開業、死亡、年祭等は之
を賀し之を吊とる情を表するか爲め多少の寄贈をな
すも差支なしと雖も徒に誇大と事とし華美を競ふか
如き無益の習慣を襲ふことなく只管其困憊を表する
よ止まるべく又之よ答ふるの慣習は(吉禮に赤飯、凶
禮に餅類を贈るの類)一切之を廢すへし

第二類 第一類の外髮置、袴着、帶解、其他病氣見舞、等凡て
吉凶禍福に係る贈答ハ一切之を廢すへし

第三類 年玉、雛餅、柏餅、彼岸、月見、中元、歳末等總て季節
よ係る交互の贈答は一切之を廢すへし

第四類 無沙汰見舞又ハ手土産の類臨時無要の寄贈は一

切之を廢すへし

第五類 臨時興を報し歡を分つの寄贈は(例へば釣漁遊獵に魚鳥を獲又は園中の花卉果菜若くは他來の物件等を割愛分甘するの類)以上の類中にあらずと雖も此類は元來其興を味ひ歡と共にするに止まるものなれば固より答禮をなさ、るへし

第六類 新刊の圖書其他發賣等に係る諸物品の寄贈ハ差支なしと雖も勿論答禮を爲すの限にあらず

右の會約に従ひ本會に加入せんと欲する者の姓名住所業務を記載し入會費金拾錢(郵便切手を代用するも差支なし)を添へ發起人の中へ申込むへし然る時は會員名簿に記入し追て會員姓名報告書を送附すへし

發起人

- | | | |
|------|-------|------|
| 原田柳 | 原田りやう | 穂積陳重 |
| 穂積歌 | 堀田みち | 外山正一 |
| 外山ふさ | 戸田長 | 富永てる |
| 貫名あや | 大澤謙二 | 同作 |
| 渡邊まさ | 脇谷てい | 高嶺秀夫 |
| 高嶺専 | 高松豊吉 | 同ふみ |
| 田尻よし | 高山みち | 高橋きん |
| 堤せい | 永井久一郎 | 同つね |
| 中村信 | 中村秋香 | 村岡範爲 |
| 村岡久野 | 半島とり | 久住まつ |

- | | | |
|-------|------|--------|
| 黒岩幾 | 申田繁 | 矢田部良吉 |
| 矢田部録 | 山田千代 | 松井直吉 |
| 松井喜伊 | 小島嘉代 | 小杉すが |
| 駒井らん | 櫻井錠二 | 同三 |
| 佐久間むつ | 菊地大麓 | 同辰 |
| 木下廣次 | 同常 | 木村貞 |
| 木村作 | 箕作住吉 | 同やす |
| 關谷かや | | (以下追加) |

游浦賀記

内田周平

浦賀港。在相摸州之南偏東。南面太平洋。北控江戸灣。隔海與房總諸山相對。近者里餘。遠者二三里。西有三崎嶽。北有横砂灣。相距又各四五里。而此港特著。中村敬子曰、數語嘉永六年六月。米利堅國水師提督彼理。帥兵艦四艘來于此。有所要請。時承平日久。事起匆卒。幕府莫知所爲。遂遣吏與之相接于栗濱。姑息摸稜。曖昧結局。自是藩並草奔有志之士。爭論時事。奔走東西。無復寧歲。而幕府卒亡。則是港之開。實我國世勢之一大轉關也。每欲一到其地。睹其形勢。而有所論著。未遑也。今茲十月盡。適與松本子源遊相中。取途横濱。覽金澤鎌倉之勝。遂由横砂。抵浦賀而觀焉。南洋潮勢。劈港門而逆上者一里。匯成長澳。當其衝者。稱曰新地。東西浦賀。隔水而岐。山巒環之。左右映帶。市邑列焉。倉廩

並焉。小山春山曰、叙地勢處、甚得古法、而買舶商船集于澳內者。桅檣如林。至港門而望。大海森茫。與天無際。火船噴黑烟而走。釣艇風帆。如白鷺點於江。房總之山。蜿蜒起伏。洲渚互出。如斷如續。紆餘彎廻。眉翠黛綠。猷媚呈妍者。悉收于一矚焉。其隆然抽於港之右者。爲明神岬。有古廟。廟後二岬。曰鳥曰龜。皆取于形似。汀樹砂禽。糝點上下。龜岬之北爲觀音岬。有燈臺焉。高如千丈。港之左。挾海門與明神岬對望者。爲龜甲岸。漁屋鱗比。夕陽晒網。隱々可見。透遞於其背者爲千代岬。更南斗出於洋中。如鶴之延頸而啄者爲鶴岬。千代岬之北有平根山。山西栗濱。即幕吏與米使相接之處也。秋葉猗堂曰。筆、文心。蓋港三面負山。而一面受海。故自古買舶商船積貨甚敏。經乎太平洋者。每值急風暴雨。輒來於此以避害云。其便非三崎比。亦可謂好埠頭矣。但港豎長而幅窄。不足以容大船。饒風景而形勢不雄張。地境僻險。而運輸之道窮焉。即使斯港定爲貿易場。則其不利於我國可知也。島田篁村曰。地、知此言、余嘗聞之。象山佐久間翁建白幕府者。前後數十之不誣也。余嘗聞之。象山佐久間翁建白幕府者。前後數十百條。其能見採納者。獨有停浦賀港開橫濱之議耳。敬字曰。字。余今乃觀於實際。又按此行之所由。益服其識見之卓也。晚還旅館。剪燈命酒。與子源相酌。煮暢談酣。追想當時。感慨不已。遂書所見且感者。以爲之記。明治十八年十一月二日夜。屬稿於浦賀之客舍。

島田篁村曰。識議超卓。極有關世道之文。

小山春山曰。溯當時而論利害便否。老成之見。敬服敬服。

批評

○沖繩縣地質圖 出版ニ成リシ由其圖ハ例ノライマン流ノモノニテ地學者ニハ甚ク解シ難シ、岩石ノ種類ハ最下ノモノ(?)花崗岩、其次ニ國頭部類ト稱シ變性岩(何ノノ歟)其上ニ西表部類、(近古大統下部?)、其後ニ火山發裂セシト見エ、火山岩地面ヲ蔽ヒ(多分ハ富士岩ナル由?)其上ニ鳥尻部類(近古大統中部?)アリ、最近ノ岩ハ那覇石類ニテ珊瑚及ヒ石灰トアリ、此圖ハ異様ノモノニテ解説ヲ見サレハ地學者(Geologists)ニハ分リ兼ヌルナリ、有名ナルタルウヰン氏ノ、(Coral Islands、(珊瑚島記事))ニ依レハ諸島皆珊瑚ノ遺殼ヨリ成ル如クナレトモ、此圖ヲ見ルニ左ニハ非ラサルカ如シ

○ライン氏著、日本、○洋藉ニテ本邦ニ就キ著述セシモノニテ人ノ多ク讀ムモノハグリフス氏著皇帝國(Mikado's Empire)ポルト女史著日本内赤髯不識境(Isabella Bird, Unbrodden Path in Japan)及ヒライン氏ノ日本ナリグリフス氏ノ書ハ米國ニ行レ、日本人モ其書ヲ讀ミシモノ多クアレトモ、他ノ一書ハ本邦人其書アルヲ知ルモノ少シ、特ニポルト女氏ノ書ハ英國ニ廣ク行ワレ獨語ニモ翻譯アリ、原ヨリ女ノ識見ヲ以テ著述セシモノナレハ北海道ナドハ倫敦、巴里ナドヨリハ家數寡キ故ニ餘程野蠻ノ様ニ

筆畫セリ、左レモ大陸ニモ普通流行ノ書ナレハ讀ムモノ

邦ノ經濟上ニ就キペンヲ取リシモノト知ル B.K.

筆畫セリ、左レモ大陸ニモ普通流行ノ書ナレハ讀ムモノ

日本ハ斯ノ如キ未開國ナルヘシトノ思ヒ違テ爲シ日本人

ヲ見ルキハ其度毎ニ、此人ハ若シヤ人肉ヲ喰ヒハセヌカ

ト狐疑ヲ抱ク歐人多シ、又ハ人間ニ馬具ヲ付ケ往來スル

人種ナラント見下スモアリ(人力車ニ乗ルト察スヘシ)、

勿論兩氏ノ書ハ矢鱈ニ書立テタルモノナレハ實價定メ

テ少シ、然ルニ近頃獨乙國ボン府大學地理學教授ライ

氏(J. Rein)ハ普魯西政府ノ命ヲ承ケ日本ニ來リ七十四年及

ヒ七十五年ノ間邦内ヲ實驗セリ、先生ハ原ヨリ本職ハ植

物學ナレハ植物ニ開シ記事委シキモ万般ニ付キ實見セシ

ト特ニ多シ、四年前第一卷ハ上梓アリシカ忽チ英語ノ譯

書モ出來セリ上卷ハ地文學的其目的タリ(地理、地質、動

植物播布)、今回ハ第二卷(末卷)ヲ出版サレ日本人ノ生活

(Das wirthschaftliche Leben)其燒點タリ下卷ノ價二十マ

ルクニシテ今左ニ目次ノ概要ヲ舉ク

○(一)陸産、林産及諸般ノ工業ト題シ本邦人生活ノ内幕、

食用植物、貿易上ノ植物、牧畜、養蠶、山林、有要植物(二)

第二ハ鑛産(三)第三ハ美術的ノ工業即チ漆工、彫木、纖維

物工業、製紙、石工、眞珠取、製鑛、陶工、(四)第四ハ貿易ニ

テ細目ハ貨幣、度量衡、運搬、一千八百五十四年米國ノ

ペリー氏渡來セシ以前ノ外國貿易、本邦ト全世界ノ貿易

ニテ他ニ夥多ノ表アリ、目次ヲ見テ大要ヲ知ルヲ得、又其

人(教授)ヲ見テ學問上ノ觀察ヨリ著述セシモノタルヲ

解シ、事實ノ正鵠ナルハ喋々スルヲ待タス、下卷ハ即チ本

邦ノ經濟上ニ就キペンヲ取リシモノト知ル P. 12.

學會紀事

○地學會記事 明治十九年十一月廿六日午後三時半農商務省地質局内ニ於テ通常會ヲ開ク來會者九名

演說

上信武三國 Mesozoic 記事

菊地安君

陸前北上川東部地質記事

神保小虎君

加賀玉ノ說

巨智部忠承君

右畢テ五時三十分閉會ス

○明治十九年十二月八日午後三時半例場ニ於テ開會ス當

日來會スルモノ十八名

役員ノ改撰セラレタルモノ器品掛ニ鈴木敏君、書記ニ山

田皓君、金田橋太郎君ノ本會准員タルヲ諾ス

演說

On some Occurrence of Piedmontite in Japan

小藤文次郎君

美濃産黃玉ノ記

和田維四郎君

越後上野下野地質調査ノ結果

山下傳吉君

明治十九年六月ヨリ十月ニ至ルノ五ヶ月間本會通常

會ヲ停止セシハ會員中出張旅行等ニ由リ不在ノモノ

多キヲ以テナリ

社告

東洋學藝雜誌第六十四號 明治二十年一月廿五日發兌

目錄

- 女子の教育 理科大學教授 矢田部 良吉
- コレブス、ヒルトスと云ふ浸液虫分裂の仕方 在獨國フライベルグ大學校理學士 石川 千代松
- 熱學講義第三回(熱運動) 第一高等中學校教諭 村岡 範爲馳
- トピノウチ飛行ノ説 在獨國フライベルグ大學校理學士 箕作 元八
- 花ノ効用ヲ論ス 在英國カムブリッヂ大學校 伊藤 篤太郎
- 雜報數件
- 獨乙國留學井上哲次郎氏の來翰 (前號の續き)
- 一切文書に用ふる地名、人名、物名
- 批評
- 數理解義 菊池大麓譯述理科大學教授 櫻井 錠二
- 原書 Cliford's Common Sense of the Exact Sciences.
- 應問 磁石方向變位ノ答 理科大學助教授 田中館 愛橘

- 學會記事
- 東京數學物理學會記事
- 日本地震學會記事
- 東京動物學會

○東京人類學會

本會は從來單に人類學會と稱したる處今回東京の二字を冠せしめ付き此段廣告す○本會の目的は人類の解剖、生理、遺傳、發育、變遷、開化等を研究して人類に關する自然の理を明よするにあり○毎月報告と出版して會員に頒つ○規則を要する人は郵便切手二錢封し込みにて東京下谷仲徒町一丁目二十二番地東京人類學會事務所神保小虎方へ問ひ合はる可し

Romaji Kai Nyūkaino Tetsuzuki.

本會ハ日本語ヲ書クニ是迄用非來レル文字ヲ廢シ羅馬字ヲ以テ之ニ代フ目的トス○本會へ入會セント欲スル者ハ住所、姓名、職業ヲ記シ會費(一ケ年金壹圓但シ諸學校學生々徒ニ限リ金四拾錢)ヲ添ヘテ事務所へ申込ムヘシ○月々ノ雜誌ハ無代價ニテ會員ニ頒ツモノトス其他ノ出版物ト雖モ無代價ニテ頒ツアルベシ○細則入用ノ人ハ郵券貳錢送付アレハ直ニ呈送スヘシ

東京神田區北神保町十五番地

羅馬字會事務所

●哲學會雜誌

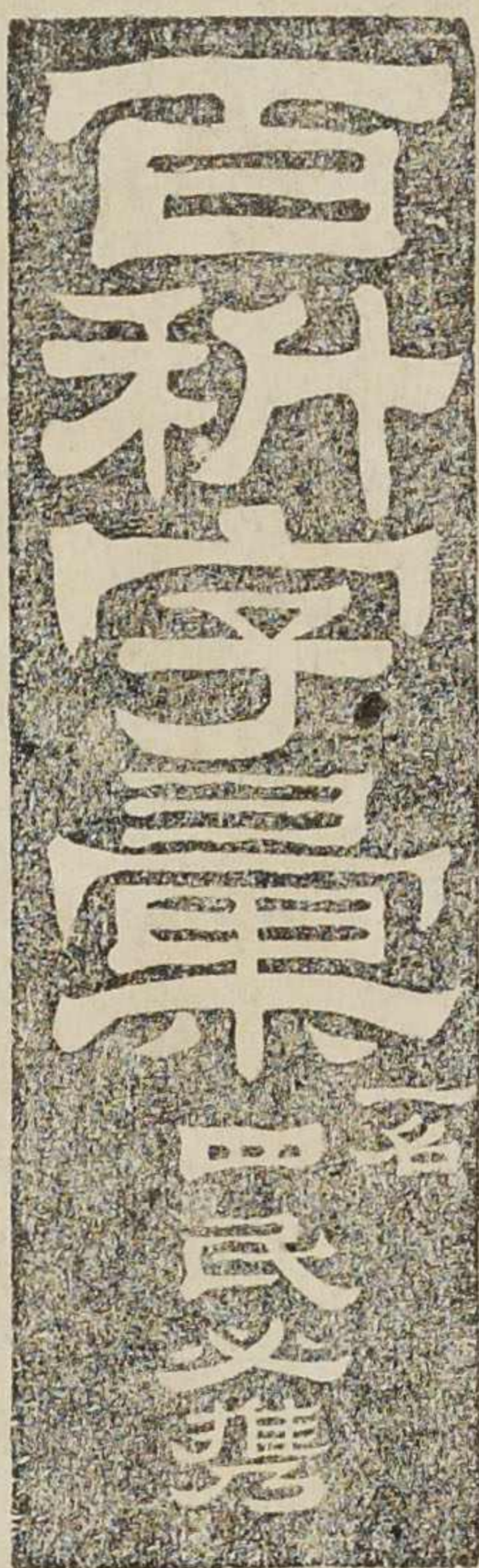
第壹号二月五日發行
定價金八錢郵稅壹錢

目次 ●本會雜誌ノ發行ヲ祝シ併セテ會員諸君ニ質ス(加藤弘之) ●哲學ノ必要ヲ論ジテ本會ノ沿革ニ及フ(井上圓了) ●(論說)哲學ノ範圍ヲ辯ス(三宅雄二郎) ●(雜錄)題哲學會雜誌(原坦山)心ノ迷ヒ(吾醒子)送人遊上毛序及中秋觀月歌(内田周平) ●(寄書)コツクリ様ノ話(不思議庵主人) ●(雜報)五件 ●(記事)本會規則并會員姓名

發行所

東京本郷弓町折哲學書院
壹丁目拾番地

敬字中村先生題字薛山三浦應先生修吉村帷德君校字



第一二版從前豫約價壹册三拾

錢遞送費拾二錢

遠近一般暫ク豫約ノ廉價ニ

テ發賣候ニ付江湖ノ君子續

々購求アラシトヲ

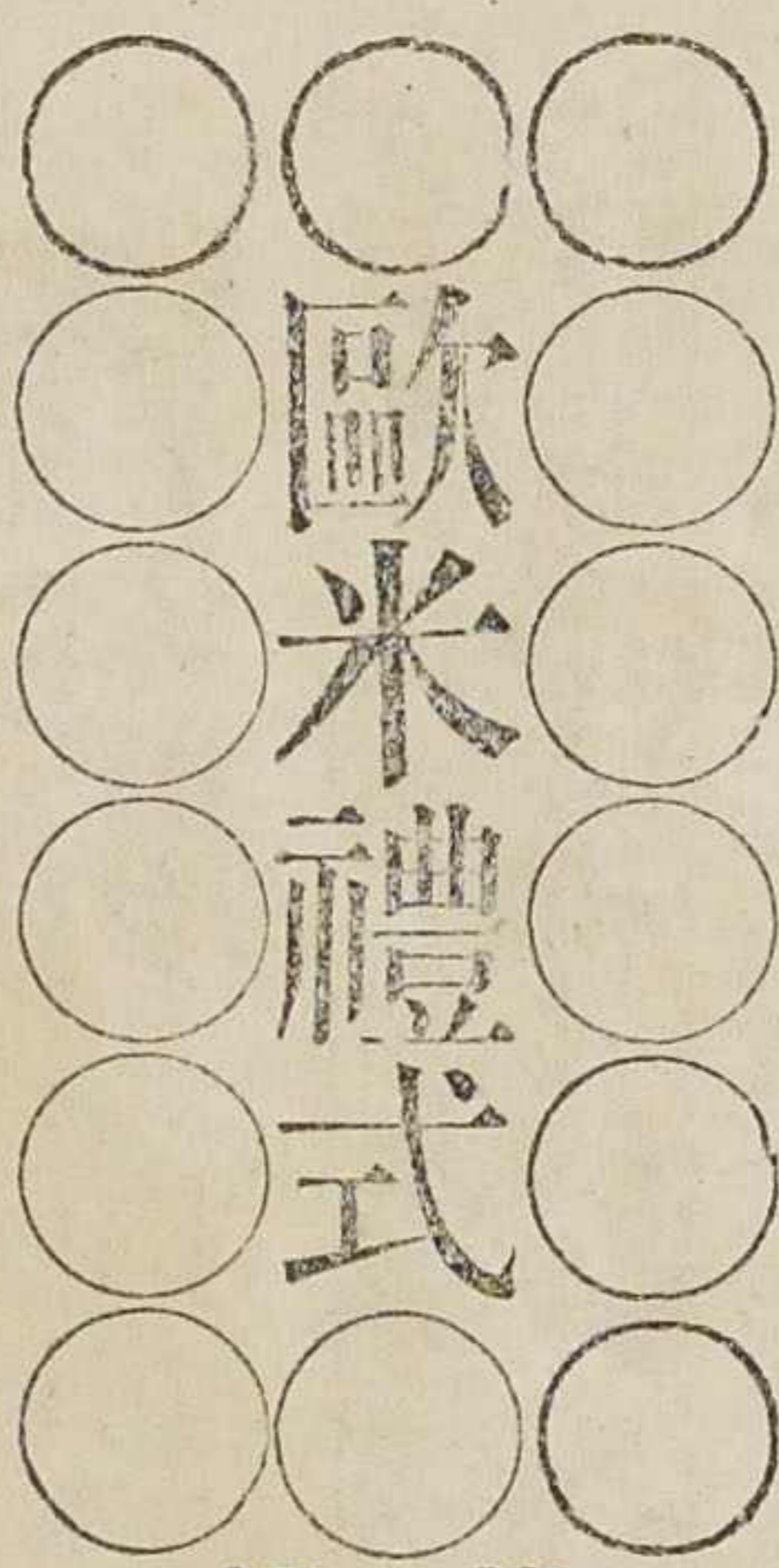
東京府知事從四位勳三等高崎五六君題字薛山三浦應先生著



一名辨
士必携

郵稅受持五拾錢

本書ハ曩ニ出版高評ヲ博シ目下第二版發賣中ニ係ル百科字彙ニ關係セル熟語ノミヲ収拾シタレハ二書相須テ始テ完全無缺ノ局ヲ結ヘリ故ニ既ニ百科字彙購買ノ諸君ハ亦必ク本書一本ヲ備ヘサルヘカラス



歐米禮式

洋裝美本
圖畫挿入

郵稅受持
價四拾錢

首藤新三兒玉利庸兩君譯述

今ヤ事々物々歐米ニ則ルノ後ルヽヲ以テ恥トナス然ニ獨欠クヘカラサルノ禮法ニ至テハ甚々他ノ進歩ト權衡ヲ保サルカ如シ是譯者ノ憾トシテ此書ヲ譯述スル所以ナリ此書ハ日常ノ進退應對ヲ細說スルノミナラス兼テ紳士淑女ノ心得等ニ至ル迄詳悉セルカ故ニ禮法ハ一切此書ニ據ラハ庶幾ハ復タ遺憾ナカルヘシ

出版發兌元

東京日本橋通壹丁目

須原屋 北島茂兵衛

賣捌東京丸善○全博聞社○全中西屋○大坂岡島○全
國文社

元老院議官中村先生題字高等中學校長野村先生序

田口卯吉君譯
有賀長雄君校

麻氏經濟哲學 上卷一冊

定價金二圓五十錢
三月中發兌

此書ノ原本ハ英國經濟學ノ大家マクシラウド氏ノ「エコノ
ミカル、フィロソフィ」ニシテ近世ノ一大著書ナリ蓋シ氏
ハ經濟學ニ於テ大ニ見ル所アリ古來經濟論ノ沿革ヲ查察
シテ之ヲ三大學派ニ區別シ悉サニ先人ノ論說ヲ揭ケテ其
正非ヲ辨シ第三學派ヲ以テ經濟學ヲ構成セントセリ此書
ハ其大成セル者ニシテ就中信約ノ性質効用ヲ論スル綿密
周到又遺憾ナシ故ニ學者之ニ就テ學ベバ能ク經濟學ノ何
者タルヲ辨知スルノミナラス兼テ古來學士ノ所見ヲ辨知
スルヲ得ベキ也

文學士添田壽一君譯
文學士井上哲次郎君校

惹穩 論理新編 西洋綴 全一冊

定價金一圓五十錢

此書ハ碩學ゼウオンス氏ノ著セル「エレメンタリー、レ
ツツン、イン、ロジック」ヲ譯セル者ニシテ文章流暢ニシテ
義理尤モ明瞭ナリ而シテ他ノ論理書ノ如ク簡約ニ失セズ
又煩蕪ニ過キス恰モ中庸ヲ得タル者ナレバ學校用ニ適切

ニシテ且ツ世ノ學士論士ニ至便ナルヲ論テ俟タザルナリ
東京日本橋
通三丁目
丸善商社書店

工學協會編纂

工學字彙

定價八十錢

此書ハ土木、機械、建築、造船其他苟モ工術ニ關係アル諸
般ノ用語ハ其高尙ナルト普通ナルトニ論ナク一切採蒐シ
一々適當ノ譯字ヲ附シタル有要ノ辭典ナリ

發賣所

東京日本橋通
三丁目

丸善

文部省御檢定濟學小教科書

古谷傳編纂●校正再版●定價金五十錢五厘

日本史要

全三冊

東京日本橋西川岸町十四番地

出版人

高見年之助

同區同町同地番

製本發
兌所

博愛書屋

賣捌
林書
日本橋區通三丁目丸善書店京橋區南傳馬一
丁目吉川半七日本橋區通四丁目牧野善兵衛
神田區裏神保町澤屋蘇吉